

創造からバベルまで 増補改訂版

2018年7月

本書は創世記1章から11章までのトピックを取り上げて、聖書全体から思いめぐらしたものです。「私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。」(ピリピ1:9-10)

<目次>

I	生ける愛の創造主	2
II	聖三位一体	4
III	時と人生	9
IV	「神のかたち」と三重職	13
V	二つの創造記事—崇拜せず管理せよ	18
VI	食べること	21
VII	善悪の知識の木	24
VIII	悪魔	27
IX	いちじくの葉と皮衣	31
X	下剋上	33
X I	二人のアダム	35
X II	神の御顔を仰ぎ見る	38
X III	結婚の祝福と限界	40
X IV	働くこと、その祝福と呪い	42
X V	全被造物の救い	44
X VI	原福音とアダムの信仰告白	46
X VII	ケルビムを除く方	48
X VIII	俺流の礼拝はだめ	50
X IX	原罪と文明	52
X X	系図の読み方	54
X X I	大審判前夜	56
X X II	大洪水	58
X X III	再出発—食物・国家	61
X X IV	契約と成就(その1)	63
X X V	契約と成就(その2)	65
X X VI	権威と服従	69
X X VII	バベル	72
X X VIII	総括 アブラハムと世界の救い主の約束	75

I. 生ける愛の創造主

1 異教・哲学思想の神観

一口に「神」といっても世界にはいろいろな宗教があり、多くの宗教があれば、その数だけの神観があるように思われがちですが、実際には、神観についてはごくかぎられた種類しかありません。二つ指標を立ててみます。一つは神の数は多数か単数かということ。もう一つは、その神は世界に対して他者（超越的）なのか、それとも世界の中にある（内在的）のかということです。

(1) 多神教

多神教とは、まず世界があり、世界から神々が生まれて来たという神話的な神観です。典型的には、ギリシャ神話、古事記などの神話の神観です。古事記に登場するイザナミは女神でありながら死んでしまったりしますし、スサノウは聖域に汚物を撒き散らして姉アマテラスを悲しませるようなふらちな神です。ギリシャ神話のゼウスは、妻の女神ヘラの目を盗んで浮気ばかりしている不道德な神です。能力的にも道德的にも有限なのが多神教の神々です。ゼウスやアポロンなどは世界に介入する神々ですから世界に対して内在的ですが、エピクロス哲学の神々は世界に対して無関心で超越的です。預言者イザヤは神々の偶像をあがめる人々について言います。「偶像を造る者はみな、むなし。彼らの慕うものは何の役にも立たない。彼らの仕えるものは、見ることもできず、知ることもできない。彼らはただ恥を見るだけだ。」（イザヤ 44：9）

(2) 汎神論（はんしんろん）

汎神論はその名のように、「すべては神である」「自然イコール神」という立場です。「神」は単一で世界に内在している原理であるということです。あらゆる事物は、神々であれ人間であれ動植物であれ石であれ、すべては「神」の現われであるということです。汎神論はしばしば大海とそこに現れる波に譬えられます。「神」は大海であって、「波」は神々、人間、動物、植物、無機物あらゆる個物にあたります。汎神論では自然と神は同時に存在するわけで、自然が存在しないならば神も存在しません。自然が汚染されれば、「神」も汚染されます。大乘仏教、ネオプラトニズム、スピノザたちの思想における神とはこういうものです。現在、世界中で流行しているニューエイジ・ムーブメントの教えも汎神論です。

「夏草やつわものどもが夢の跡」と芭蕉が詠むとき、人間の営みは限りがあっても「夏草」に象徴される自然は永遠であるという意識がうかがえます。つまり、自然を神的なものとしているのです。日本人の世界観には汎神論的気分が漂っています。しかし、人間の目に永遠と見える自然は、実は、終わりの審判の日には跡形もなくなるのです。「また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、

あとかたもなくなった。」（黙示録 20 : 11）

（3）理神論（デイズム）

啓蒙主義時代に流行した理神論(デイズム)では、神は単一で世界に対して超越的です。理神論とは、キリスト教の神観から合理主義者にとって不都合な部分を差し引いた神観です。時計工が時計を作ったが、その後、時計は自分で動いているように、神が世界を創造したが、その後、被造物は自律していて、神は被造物世界に介入はしない、できないというのです。ですから、理神論においては奇跡も起こりえないし、啓示もありえません。世界の秩序を見れば創造主の存在は認めざるをえないが、この世界を理性の力でもって支配するのは人間であって、神からも干渉されたくはないという十八世紀ヨーロッパの啓蒙思想の情念が理神論の背景にあります。代表的には英国のチャーベリーのハーバート、フランスの啓蒙主義思想家たちたとえばヴォルテール、ドイツのカントなどは理神論者です。彼らのいう神は死んでしまった神です。主イエスは、復活を否定していた合理主義者サドカイ人たちにおっしゃいました。「イエスは彼らに言われた。『そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではありませんか。』」（マルコ 12 : 24）

2 聖書的な神観

以上の三つの神観に対して、聖書的神観とはどのようなものでしょうか。

「初めに、神が天と地を創造した。」（創世記 1 : 1）と創世記冒頭にあるように、神が創造なさってはじめて天と地が存在するようになりました。世界が存在するまでは、ただ神のみが存在していたのです。世界が存在しなくとも、神は神ご自身だけで存在しうるお方です。主イエスは最後の晩餐の席上、御父への祈りでこう祈られました。「今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」（ヨハネ 17:5）また、ヨハネ福音書冒頭には、「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。…中略…すべてのものはこの方によって造られた。」（ヨハネ 1:1,3 抜粋）と、万物の存在に先駆けて神が存在されたと述べています。真の神は何者にも依存することなく、ご自分で存在しています。これを神の自存性といいます。

神の自存性は、多神教や汎神論の神観にはないことです。多神教の神話では世界がすでにあって、そこに神々が生まれてきたのですし、汎神論においてはすべてが神なのですから、神の存在と世界の存在は同時的のです。

また、神は、六日間で創造の最後の冠として人を造り終えると、人間に対して次のように啓示されました。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。」（創世記 1:28）超越者である神が被造物に語りかける啓示は、理神論の神観にはありえないことです。また、神はエジプト脱出の時代、王国の危機のエリヤ・エリシャの時代、イエスと使徒の時代には特に多数の奇跡を起こされました。神は通常、世界を治めるために被造物である自然

法則を用いていますから、人間は実験や観察によって自然法則を発見し数式化もできます。神の被造物に対する御支配・御配慮を摂理といいます。けれども、神はときに通常 of 自然支配の法則を停止したり、強化したりして奇跡を起こします。奇跡は理神論ではありえません。

聖書を通して私たちに語りかけてくださる神は、汎神論の非人格の法則ではありませんし、また多神教の不道德で無力な神々ではありませんし、理神論哲学者の「死んだ神」ではありません。万物を無から創造しかつ支配し、私たちの祈りに答えてくださる、生ける愛の人格神なのです。

II 聖三位一体

神が父と子と聖霊の三位一体でいらっしゃるということは、人間が考えついたことではありません。人間が作った宗教では、多神教か一神教か無神論になるのです。神が聖書においてご自身に関して啓示をお与えになったからこそ、私たちに神が唯一であり、かつ、父と子と聖霊の交わりをもっていらっしゃる事がわかるのです。三位一体は、理解しつくすことはできませんが、よく味わうと、そこには深い意味があることがわかってきます。

1 聖書における三位一体の教え

「さあ人を造ろう。われわれのかたちにおいて、われわれに似せて。」(創世記 1:26) 神はこのようにおっしゃって、人間を造りました。不思議なのは、唯一の神がご自分をさして「われわれ」ということばです。唯一の神のうちには複数の人格があるようです。

古代教父ユスティノスは「ユダヤ人トリュフォンとの対話」62:1-4の中で、創世記1章26節について、次のように解説しています。「この箇所によってわれわれは、神が数として区別された、理性をもつ何者かに向かって語っているということを実に知る」。そして、「むしろ、実際父から出、すべての被造物より先に生まれた方が彼とともにいたのであり、その彼に父が語りかけたのだ。それは御言葉がソロモンによって明らかにしたとおりである。つまり、まさに彼こそすべての被造物に先立つ根源であり、父から子として生まれた方であり、ソロモンが知恵と呼ぶ方である。」と。「ソロモンが知恵と呼ぶ方」については箴言8章を参照。また、同じく教父エイレナイオス(130-202)も「使徒たちの使信の説明」55で、創世記1:26を説明して、「父は不思議な助言者としての子に語りかけているのである。」と述べています。

これと対応する新約聖書の箇所は、最後の晩餐席上での主イエスの祈りです。「世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」(ヨハネ17:5) 永遠の昔から父と子は御霊における交わりのうちに生きておられます。同じヨハネ福音書冒頭にことばなる神イエスについては「初めに、ことばがあった。ことばは神とともに

にあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。」とある通りです。

とはいえ、旧約において強調されているのは、やはり神の唯一性です。ともすれば多神教に陥ってしまいがちな人間には、まず神の唯一性を知る必要があるからでしょう。新約にいたって、神のうちに三つの位格があることが明白にされます。大宣教命令に「父と子と聖霊の名によって彼らにバプテスマを授け」（マタイ 28:19）というくだりで、「名」ということばは単数形です。父と子と聖霊がお一人であることが表わされています。

2 父と子と聖霊の関係

(1) 絶対者でありかつ、愛の神であることと三位一体

第一に、神が絶対者であり、かつ愛の神であることと三位一体の関係です。神が絶対者であるということは、神が唯一であることを意味します。絶対とは匹敵するものがないという意味ですから。絶対者を名乗るものが何人もいたら、それらは決して絶対者ではありません。相対者です。他方、神が愛であるということは、神は交わりの神であるということの意味します。愛というのは、人格と人格の交わりであるからです。神が愛であるということは、唯一の神のうちに人格と人格との交わりがあることを意味します。

中世にサン・ビクトール修道院のリチャードは御子が御父から永遠に生れたことについて、祈りのうちに思いめぐらして次のように書き残しています。「最高善、全く完全な善である神においては、すべての善性が充満し、完全なかたちで存在している。そこで、すべての善性が完全に存在しているところでは、真の最高の愛が欠けていることはありえない。なぜなら、愛以上に優れたものはないからである。しかるに、自己愛を持っている者は、厳密な意味では、愛 (caritas) を持っているとは言えない。したがって、『愛情が愛 (caritas) になるためには、他者へ向かっていなければならない』。それで位格 (persona) が二つ以上存在しなければ、愛は決して存在することができない。」

さらに聖霊の発出について次のように言います。「もしだれかが自分の主要な喜びに他の者もあずかることを喜ばなければ、その人の愛はまだ完全ではない。したがって [ふたりの] 愛に第三者が参与することを許さないならば、その人の愛はまだ完全ではない。反対に、参与することを許すのは偉大な完全性のしるしである。もしもそれを許すことが優れたことであれば、それを喜んで受け入れることは一層優れたことである、最もすぐれたことは、その参与者を望んで求めることである。最初に述べたことは偉大なことである。第二に述べたことは一層偉大なことである。第三に述べたことは最も偉大なことである。したがって最高のかたに最も偉大なことを帰そう。最善のかたに最もよいことを帰そう。

ですから、前の考察で明かにしたあの相互に愛し合う者 [すなわち、父と子] の完全性が、充満する完全性であるために、相互の愛に参与する者が必要である。このことは、以上と同じ論拠から明かである。事実、完全な善良さが要求することを望まなければ、神の充満する善良さはどこへ行ってしまおうだろうか。また、たとえそれを望んでも実現する

ことができなければ、充滿する神の全能はどこへ行ってしまおうか。」

唯一の神が父と子と聖霊で、そこに愛の交わりがあるということを思いめぐらしてみると、その似姿として創造された私たちの生き方についても考えさせられます。

(2) 父と子と聖霊それぞれの特性

第二に、父と子と聖霊の区別を学びましょう。父は神性の根源です。キリストは生むお方の「ひとり子」(ヨハネ 1:18)として、語るお方の「みことば」(ヨハネ 1:1)として、本体であるお方の「写し(かたち)」(コロサイ 1:15)として、啓示されています。

子は、父から永遠に生まれたお方であり、父のことばであり、父の写しです。しかし、それは子が被造物であるという意味ではありません。子も永遠の神です。コロサイ書において「御子は見えない神のかたちであり、造られたすべての者より先に生まれた方です。」と、「造られたすべての者」と「生まれた」が対比されているのは、子は被造物ではなく、神性において父と同一であることを意味しています。人から生まれたものは人ですが、人が作った物は人でないのと同じです。神によって造られたものは被造物ですが、神から生まれたお方は神です。

御霊は単なるやエネルギーと誤解する人がいますが、生ける人格です。「人格とは知性と感情と意志がある統一的継続的意識である」と定義するそうですが、実際、御霊は語り(使徒 8:29)、悲しみ(エペソ 4:30)行動するお方です。また、聖書は、聖霊を「神の霊」とも「御子の御霊」とも呼びます(ローマ 8:9)。御霊は父と子から出ており、御霊において父と子は結ばれているのです。アウグスティヌスは、愛する者・愛される者・両者を結ぶ愛というふうに三位一体を理解して、特に聖霊を愛であるという解釈をしています。

(3) 父と子と聖霊の役割分担

第三に、被造物に対する御業における父・子・聖霊の役割について学びましょう。三位一体の神はすべての御業において協働しておられます。

創造において、「初めに神が天と地を創造した。地は形がなく、何もなかった。闇が大いなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。そのとき、神が『光よあれ』とおおせられた。すると光ができた。」(創世記 1:1-3)とあります。ここに主宰者である父と御霊とことば(御子)が登場しています。

また、救いにおいても、父は受肉を計画して子を派遣し(ガラテヤ 4:4)、聖霊が処女マリヤに働いて受肉が実現し(マタイ 1:18)、イエスの公生涯の始まりに当たって父の声と、御霊の注ぎがありました(マタイ 3:16, 17)。子は、御霊によって、父に祈りつつその御旨のままに、十字架への道を進まれ、また、子は父が送ってくださった御霊によって復活したのです(ローマ 8:11)。そして、御霊は子が成し遂げた贖いを私たちに適用してくださいます。このように、三位一体の神は、創造においても救いにおいても、父は主宰、子は実行、聖霊は適用・完遂という役割分担をなさっているようです。

(4) 「御子の御霊」という呼び名の意義

第四に、御霊が新約聖書において父の霊であるだけでなく、「御子の御霊」（ガラテヤ 4:6）つまり、この歴史のなかに来られたイエス・キリストの霊でもあるとされていることは、現代的文脈においてとても重要なポイントです。というのは、「大地の霊」とか「母なる大地」という汎神論的な自然宗教が流行している現代であるからです。J. モルトマンは、創世記 1 章 2 節の神の霊が、汎神論における母なる大地の霊とつながりがあるかのような物言いをしています。「この大地は、私たちの共通の環境であり、また、現実的な意味において『私たちの母』です（シラの 40:1）。」（『いのちの泉』 p46）聖霊が「（父なる）神の霊」と呼ばれるだけであれば、汎神論との区別があいまいになってしまいますが、新約聖書は「神の霊」は同時に、「御子の御霊」であられるということをはっきりと示しているため、自然宗教における汎神論との区別がされるのです。

(5) 至れり尽くせりの神

第五に、真の神が至れり尽くせりの神でいらっしゃるということについて。人の宗教的本能は神が絶対者であることを望みます。絶対者でなければ、頼るに値しないからです。多神教のように道徳的にも問題があり、能力的にも欠けがある神々では信頼できないでしょう。しかし、もし神が絶対者であれば、土から造られたちっぽけな人間にとってはあまりにも遠くて私たちは神を知ることができません。私たちのもう一つの宗教的必要性は、神がどのようなお方であるかを具体的歴史的人格において知ることです。しかし、歴史の過去においていかに素晴らしい神のご人格がいたとしても、もしそれが過去の人であって、きょう生ける神からの導きと力が注がれないとすれば、信仰生活は成り立ちません。

人間が工夫したいかなる宗教も、これら「絶対者」「具体的歴史的人格」「今日という日の導きと力」という三つの求めを同時に満たすものではありません。ただ三位一体の神を啓示する聖書の福音のみが、父において神の絶対性を啓示し、御子において人格としての具体性を啓示し、かつ、聖霊において今日生きる力を与えるものなのです。

神の絶対性については、「神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人がだれひとり見たことのない、また見ることもできない方です。誉れととしえの主権は神のものです。」1テモテ 6:14, 15

神が歴史的具体的人格として来られたことについては、「ことばは人となって、私たちの間に住まれた。・・・いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」ヨハネ 1:14, 18

神が、今日という日にみことばを照らして導いてくださるお方であることは、「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたとともにおられるためにです。」ヨハネ 14:

3 三位一体と信仰生活

では、聖三位一体と、私たちの信仰生活とはどのようなかかわりがあるのでしょうか。

(1) 人間の知力の限界をわきまえる

第一に、私たちは人間の知性の限界を学びます。三位一体の教理は、神は人間の知性では計り知れないお方であることを教えるからです。私たちは知性の限界を認めて、聖書が啓示するままに父と子と聖霊がそれぞれ完全な神であられ、かつ、神が唯一であることを信仰によって受け入れます。ローマ 11:33 「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがないことでしょう。」

(2) 神の前に独り立つことを知る

第二に、神は唯一絶対のお方ですから、私たちの信仰には神の前に責任ある者として独り立つという側面もあると知るべきです。聖なる神の前で、あなたの罪は、あなた自身の責任です。その事実を認めてこそ、イエス・キリストの十字架の贖いの尊さを悟ることができるでしょう。創世記 3:9 「神である【主】は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」

(3) 交わりに生きることを知る

第三に、神は三つの人格の交わりですから、神のかたちとして造られた私たちの信仰も孤立したものではなく、隣人愛において具体化されるものであることを学びます。神を愛するといいいながら、身近な兄弟姉妹を愛していないなら、その愛は偽りです。

1ヨハネ 1:6,7 「もし私たちが、神と交わりがあると言っていながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行ってはいません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」

(4) 神に祈る

第四に祈り。祈りは信仰生活の呼吸です。そもそも私たちが祈るとき、私たちは三位一体的に祈っているのです。私たちの御霊が私たちのうちに語りかけて祈りたいという願いを引き起こし、私たちは父なる神に向かって、御子の御名によって祈りをささげます。私たちの信仰生活は、三位一体的なものなのです。エペソ 6章18節「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。」

(5) 教会が多様性と統一性(一致)を重んじることを知る

第五に、神が三位一体であられることは、教会が多様でありかつ一つであるべきことの根拠です。「霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。務めは種々あるが、主は同じである。働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである。」(1コリント12:4-7)「御霊・主(イエス)・(父なる)神」の三位一体が、12章に展開される教会論の土台となっています。

Ⅲ 時と人生

「全てのことには定まった時期があり、天の下のすべての営みに時がある。

生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。植えるのに時があり、植えた物を抜くのに時がある。

殺すのに時があり、癒やすのに時がある。崩すのに時があり、建てるのに時がある。

泣くのに時があり、笑うのに時がある。嘆くのに時があり、踊るのに時がある。

石を投げ捨てるのに時があり、石を集めるのに時がある。抱擁するのに時があり、抱擁をやめるのに時がある。

求めるのに時があり、あきらめるのに時がある。保つのに時があり、投げ捨てるのに時がある。

裂くのに時があり、縫うのに時がある。黙っているのに時があり、話すのに時がある。

愛するのに時があり、憎むのに時がある。戦いの時があり、平和の時がある。

働く者は労苦して何の益を得るだろうか。

私は、神が人の子らに従事するようにと与えられた仕事を見た。

神のなさることは、すべて時になんて美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。

しかし人は、神が行うみわざの始まりから終わりまでを見極めることができない。」

(伝道者の書3章1-11節)

本章のテーマは「狼は子羊とともに宿り・・・」というあの完成の日をめざす、神の歴史の展開のなかで、いかに生きてゆくか?です。

1 多にして一の世界

私たちが住んでいる地球は、一日二十四時間で自転しています。もしそうでなければ、回し忘れた豚の丸焼きが片面黒焦げ、片面ナマというふうには、地球は片面は灼熱地獄、もう片面は暗黒の寒冷地獄です。

さらに神は地球を傾けて、生物たちが生活できる面積を広くしてくださいました。もし地球が傾いていなければ四季の訪れはなくなり、北海道あたりまで寒帯になり、本州も大半冷帯になってしまいます。また水は高い所から低い所へと流れていきますが、海水は太陽熱を受けて水蒸気となって上空で雲を形成し、大気の循環によって内陸部に運ばれてまた雨を降らせます。雨で大地がうるおうと植物はすくすく育ち、動物に食糧を提供します。ですが、植物も動物に助けてもらっています。植物は花を咲かせて虫たちに蜜を提供し、虫たちは花を受粉させ植物の結実を助けています。鳥たちは実を食べると、遠くへその種を糞という肥料をつけて落とします。神の作品をつぶさに見れば見るほど、その知恵に鳥肌が立つほどの驚異と畏怖を感じます。

神は、これほど多様な被造物を、なんと見事な一つの調和のうちに造られたことでしょう！この一つでありながら多様であり、多様でありながら一つである世界には、三でありながら一つであられる神の影が落ちているということができるといえるでしょう。

2 「時」のラセン構造

この多にして一の被造世界は、神の配剤のもとで治められています。

自然宗教になじんだ古代ギリシャ人は時を円環としてとらえたと言われます。春夏秋冬の営みや、生まれ成長し子孫を残して死んでいく生の営みや、月の満ち欠けを見ていると、時はただ繰り返すに見えたからでしょう。もしそうなら歴史というものは成立しません。今あることは、かつてもあったことであり、未来にもまたあることであって、なにも特別なことではないからです。ですから、ギリシャ文化には歴史意識がありませんでした。

ところが聖書によれば、「初めに、神が天と地を創造した。」とあり、キリストによる最後の審判があります。時には始まりと終わりがあるのです。時は創造から審判に向かって突き進む矢です。今年、歴史の中にたった一度しかやって来ないし、今日という日は、ただ一度きりです。今年、特別な意味ある年であり、今日は特別な意義深い日です。ここに歴史が成立します。

ところで、創世記1章は「時」のもう一面をも語っています。「神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。」(創世記1:16)地球が一回りして一日、七回りして一週間、地球が太陽のまわりを一回りして一年が経ちます。月は三十日で満月と新月を繰り返しています。神は地球の自転と公転、月の満ち欠けを時計とされました。天体の空間における円運動が、時の構造をなしているということはたいへん興味深いことです。「時」には確かに、このように円環的な側面があります。古代人ギリシャたちは、この「時」の一面をとらえたのでした。

というわけで、聖書によれば「時」には始まりと終わりがある線分的な側面と同時に、円環的な側面があります。「時」は繰り返しつつ、目的に向かって前進していく幾重もの螺旋構造をしているのです。レビ記25章の暦の記述にも時の螺旋構造が記されています。

一年を七度繰り返して七年目は安息の年。安息の年を七度繰り返して、その翌年五十年目はヨベルの年で、ここで振り出しに戻ります。「時」には、今年は一回きりだという面と、繰り返しという面との両方があるのです。

3 「時」と私たちの人生

(1) 緊張感と慰め

「時」はその始まりから終わりに向かってまっしぐらに進んでいきます。長い歴史の中で今年という年は一回しかないし、今週は一回きりだし、今日は一回きりです。だから、私たちは新鮮な緊張感をもって新しい年に、新しい週に、今日という日に臨まねばなりません。

それにもかかわらず、夜、床について「今日もだめだったなあ」と落胆することがあります。神はもう一度新しい朝をくださって「さあ、やり直すがいい。」と励ましてくださいます。週の初めの日に、また、年始に私たちは同じように、神から「さあもう一度チャレンジせよ」と励ましをいただくことができます。確かに、昨日と今日は違うし、先週と今週は違うし、去年と今年は違いますが、でも再スタートを許してくださるのです。過ちやすい私たちにとって、これは慰めではないでしょうか。

(2) 不易流行(ふえきりゅうこう)・・・伝道とは

芭蕉は、すぐれた俳句は「不易流行」なるものだと言いました。「易」とは「変わる」ことを意味します。「不易」とは「変わらない」ことです。昔文房具屋さんで売っていた「フエキ糊」というのは、米糊に防腐剤を配合してかびないようにした糊でした。「不易」とは変わらざる伝統を意味します。他方、「流行」とは時代によって変わることを、斬新さです。伝統と刷新です。言い換えると、「不易」とは一なる原理であり、「流行」は多なる原理です。伝統と流行とが切り結んだところに散る火花、そこにすぐれた俳句が生まれます。俳句にかぎらず、定番料理に一工夫加えたり、服装も伝統的なものに一つ新しいものを加えるとおしゃれになったりする。これは不易流行です。

伝道の実践でも、不易流行の原理はたいせつです。コンテクスチュアライゼーション(文化脈化)と称して、時代と文化に合わせて福音の内容を変えてはいけません。「神に対する悔い改めと主イエスに対する信仰」という福音は不易です(使徒 20:21)。時代と文化に柔軟に適合させるべきなのは、福音を伝える方法です。私たちは不可変の十字架のこぼれを、時代と文化に合った可変的な方法を工夫して伝えていくのです。

伝道とは、特別恩恵を共通恩恵の器に入れて運ぶことです。特別恩恵とはクリスチャンだけが神様からいただいている恵み、つまり、永遠のいのちであって、共通恩恵とはクリスチャン・ノンクリスチャン共通していただいている恵みです。私たちは、共通恩恵というところでノンクリスチャンの人々とつながりをもっていますから、何か共通恩恵のところでコンタクトをつくって特別恩恵を伝えるのです。腰痛体操というのは共通恩恵なので、

クリスチャンもノンクリスチャンもともに受けることができるものです。それと併せて、イエス・キリストにある罪のゆるし、永遠のいのちの福音という特別恩恵を伝えます。

罪の赦し、永遠のいのちはふ不易つまり不可変です。しかし、共通恩恵は相手のもっている文化や流行に応じて工夫するのです。使徒パウロは次のように言いました。

「9:19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。

9:20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。

9:21 律法を持たない人々に対しては、——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。

9:22 弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。」（1コリント9章19-22節）

パウロは福音を伝える相手がユダヤ人であれば、ユダヤ人の文化・習慣に抵抗がないように自分の生活をあわせて、福音を伝えました。それはもともとユダヤ人であるパウロにとってはそれほど困難でなかったと思います。けれども、パウロは相手が異邦人である場合には、異邦人の文化・生活習慣に応じて自分の生活習慣を合わせたのです。これは結構たいへんだっただろうと思います。ユダヤ人は豚肉やウナギなど食べませんから、異邦人とまず友だちになり一緒に食事をするということになると、その壁を乗り越えていくことは生理的にたいへんだっただけでしょうが、パウロはそれを乗り越えて行きました。一人でも多くの人々を救うためです。

先日、ある牧師の話をお聞きしました。先生は子どもにお菓子をやっても教会に来なかったのも、ピアノを無料で教えてあげるよと伝えてました。自分のレッスンを待っている暇な子供たちが宿題をしていたので、教会のメンバーで学校教員だった兄弟姉妹が手伝わせてくださいと子供たちに勉強を教えるようになりました。スポーツ、お習字、お花、指圧、料理など何でもいいのです。私たちは何か共通恩恵を手掛かりとして、人々を教会へとお招きする工夫をしていきたいものです。

IV 神のかたちと三重職

1 人は御子のかたちにおいて造られた

(1) 人の尊厳の根拠

人間とは何でしょうか。古代の哲学者は「人間とは理性的動物である」あるいは「社会的動物である」と言い、近代の進化論者は、「進化の頂点に立つ高等動物だ」と言いました。今後、もし遺伝子をコントロールして子どもを作るような時代になってしまうと、多くの人は「人は遺伝子情報の束だ」と考えるようになるかもしれません。

自分が何者であるかという認識はとても大切なことです。もし自分はロボットだと思っているならば、その人はロボットのような生き方をするでしょうし、他人のこともロボットのように扱うでしょう。自分はサル的一种にすぎないと自覚している人はサルのような生き方をするでしょうし、他人のこともサル扱いするでしょう。今後、人間を遺伝子の束だと考える人は、人間をどんな存在とすることになるでしょう。では創世記は、人間とは何であると私たちに教えているのでしょうか。

「神はまた言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものつとを治めさせよう』。神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。」(創世記1章26、27節 口語訳)

何とすばらしいことでしょう。人間とは「神のかたち」に似せて造られた存在なのです(コロサイ1:15参照)。ここにこそ、人間の尊厳の根拠があります。人間が墮落したのちも、この人間の尊厳の根拠は変わりません。「人間の悲惨は王座から転落した王の悲惨である」とパスカルは言いました。腐っても鯛です。大洪水の後に、神様はノアにおっしゃいました。

「人の血を流すものは、人に血を流される、
神が自分のかたちに人を造られたゆえに。」(創世記9:6 口語訳)

「わたしたちは、この舌で父なる主をさんびし、また、その同じ舌で、神にかたどって造られた人間をのろっている。同じ口から、さんびとのろいとが出て来る。わたしの兄弟たちよ。このような事は、あるべきでない。」(ヤコブ3:9, 10 口語訳)

現代の物質主義的な価値観の下では、人間の尊厳の根拠が見失われてしまっています。ただ、聖書のみが私たち人間の尊厳の根拠を明らかにし、私たちが自分自身と隣人を大切にすべき根拠を示しています。

(2) 「神のかたち」とは御子である

ところで、神は新約の時代になって、人間創造のモデルである「神のかたち」とは御子キリストのことであることを明らかにされました。「御子は、見えない神のかたちであり、

造られたすべてのものより先に生まれた方です。」(コロサイ 1:15)そして、御子は御父と瓜二つですから、御子に似ているということは、御父に似ていることでもあります。

「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」(マタイ 5:48)

人はもともと三位一体の神様の第二人格である御子に似た者として造られたのです。だからこそ、人が墮落したとき、御子をご自分に本来似た者として造られた人を救うために、自ら人となってくださったのでした。そして、御子イエスを信じる私たちは、ひとたびアダムにあって失ってしまった御子のかたちを回復し、その完成を目指して生きていくようにと召されて御霊を与えられているのです。

御霊は、御子の御霊でもあり、神の御霊でもあられますから、御霊をいただいた人は御子と御父に似た者とされてゆきます。これが聖化と呼ばれることです。それは、御霊の実である「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」(ガラテヤ 5:22, 23)という品性になっていくことでもあるわけです。

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」(2 コリント 3:18)

以上のようなわけで、聖化とは本来、父にうりふたつの御子に似た者として造られた私たち人間を、御子が聖霊によってご自身と父とに似たものとしてくださっていく継続的なわざなのです。

2 交わる者

ところで、神様はここで「われわれのかたちに人を造ろう」とおっしゃいました。ある聖書学者たちは、これは多神教の資料が紛れ込んだのだとか、神が御使いに呼びかけたのだとか言います。また、それほど用例は多くないのですが、「尊厳を表す複数表現」だという理解をする人々もいます。たしかに神は唯一であると確信していた創世記の記者がなぜ「われわれのかたちに」と書いたのか、とても不思議です。しかし、この後に長い時間をかけて啓示されていく箴言 8 章の「知恵」、新約聖書特にヨハネ文書やパウロ文書によって、この「われわれ」は三位一体の神の交わりを指していることが明らかにされてきました。「われわれ」という記述については創世記の記者の理解さえも超えて、創世記記者を導かれた御霊のお働きがあったわけですね。箴言 8 章、新約聖書を見るならば、この「われわれ」というのは、御父と御子の交わりを示していると読むのが、ごくしぜんです。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。」ヨハネ 1:1-3 口語訳

「父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい。」ヨハネ 17:5 口語訳

「御子は、見えない神のかたちであって、すべての造られたものに先だって生れたかたである。万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。」（コロサイ 1: 15, 16 口語訳）

聖書の靈感において聖書記者たちは、自動タイプライターのように機械的なものではなく、その記者の知性と感情と意志が用いられたことは、聖書各書の書かれようを見ればあきらかなことです。わけもわからず書いたわけではありません。そういう靈感のありかたをふつう十全靈感説（Plenary Inspiration）と呼びます。しかし、それだけでは聖書の啓示を全面的に把握できるわけではありません。聖書啓示は、神の御霊の導きによって長年にわたってさまざまな記者が用いられて徐々に光を増してきたわけですから、前の記者が必ずしもよくわからないで書いた部分が、後の記者たちの記事によって明らかにされていくという現象があったのです。創世記の記者が最初の読者にあてて伝えようと意図した以上の内容を、実は含んでいる場合があるのだということを意味しています。

聖書積義というのは、まずは聖書の各書の記者が最初の読者に伝えようと意図したことをつかむことを目的としています。しかし、もしそこで留まって満足してしまったり、行き着くべきところまでは到達していません。聖霊の意図にまで到達してこそ、十分な聖書積義です。

古代教父たちは、そのことをわきまえていましたから、先に三位一体を学んだときのように、創世記 1 章 26, 27 節における「われわれ」というのが、三位一体を示唆していると指摘しています。

三位一体の神が似姿として人間を創造されたのですから、「神のかたち」とは、まず人が人格的交流のうちに生きる存在として造られたことを意味しています。父と子が聖霊にあって愛の交わりを持っていらっしゃるように、人間もまた人格的な交流をする存在です。

イエスは、すべての律法を二つに要約して人間存在の目的を教えてくださいました。「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くしてあなたの神である主を愛せよ」。「あなたの隣人を自分と同じように愛せよ」。人の目的は、全身全霊をもって神を愛し、隣人を自分と同じように愛することなのです。

どんな物でも正しくその目的に従って使用していればめったに故障しませんが、目的を外して誤用すると壊れてしまうものです。もし人間が他人を憎むために造られていれば、憎めば憎むほど体調が良くなるでしょう。けれども実際は逆で、人のことを憎んでいると、その人は心もからだも病んできます。人間はやはり愛するために造られているのであって、憎むために造られているのではないのです。うれしいことですね。ですから、私たちは神を愛し隣人を愛するという至高の目的のために、生活のすべてのことをすべきです。

3 キリストと私たちにおける、知義聖と三重職

(1) 知義聖

もともと「神のかたち」である御子に似た者として造られた私たち人間の任務を知るために、神がキリストにあって救われた人を再創造してくださるといふ、新約聖書の約束を見てみましょう。「またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした」（エペソ4章23～24節）。「新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです」（コロサイ3章10節）とあります。「造り主のかたち」とはすなわち御子イエスのことです。

これら新約聖書における再生にかんするみことばから逆算して、改革派神学では伝統的に「神のかたち」の内容を「知と義と聖」という三つの側面にとらえてきました。言い換えると、知性と道徳性と宗教性において、人は神のかたちに造られているということです。

人は知性という点でたしかに他の被造物と比べて特徴があるものです。人のことを学名のラテン語で「ホモ・サピエンス」、つまり「知恵ある人」と呼ぶのは根拠のあることです。いかにチンパンジーやイルカの知能が優れているといっても、人間の比ではありません。

また人間は道徳性において特徴があります。道徳性というのは、責任を問われ得る自由な存在であるということの意味します。エンジンのトラブルで自動車事故が起きても、自動車は責任を問われません。自動車には自由がないからです。責任を問われるのは整備士や設計者という人間です。人は自由があるから責任を問われる、道徳的存在なのです。

また、宗教性とは、人間は聖なるものを意識せざるをえない存在であるということです。カルヴァンはこれを宗教の種と呼びました。かつて無神論国家を標榜したソ連のような国では、「宗教はアヘンだ」として無神論教育が国民に施されましたが、人間から宗教を奪い取ることはできませんでした。皮肉なことにモスクワの赤の広場にはレーニン廟が設けられて、レーニンの亡きがらを崇拝する人たちが絶えませんでした。宗教性は人間の本性の一部なので、消しようがないのです。

(2) 三重職

この知と義と聖は、キリストと教会の三つの職と対応しています。知は預言職に、義は王職に、聖は祭司職に対応しています。これら三つは切り離せないものなので、三重職といったほうがよいようです。キリストは、この三つの職務をへりくだった低い状態と、復活して昇天し御国に着座された高い状態とで果たされます。キリストの二状態については、ピリピ2：6-11を参照。

キリストは神を知り神を知らせるといふ預言職を果たされました。キリストは、低い状態としては、受肉して「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」（ヨハネ1章18節）とあるように、神を教えてくださいました。私たちはキリストによって、神と神のみこころを知ることができます。

また高い状態としては、キリストは復活し昇天し着座され、聖霊を教会に送ってみことばを啓示し、かつ、これを理解するための導きを与えて、預言者の務めを果たされます。

キリストは敵であるサタンと戦って民を守り、民を統治する義なる王です。低い状態において、十字架の直前、イエスはいばらの冠、派手な衣、王しゃくの代わりに葦の棒と、王のいでたちをさせられ、「ユダヤ人の王様万歳！」と辱められました。罪状書きには「ユダヤ人の王」とありました。イエスは義なる王として、身を捨てて十字架の死においてサタンと戦い、私たちが敵の手から救出されたのです。高い状態としては、復活し、父なる神の右の座に着いたキリストは、王として世界と教会を統治しています。「(父なる神はキリストを)すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました」(エペソ1章21~22節)。

またキリストは聖なる祭司として、低い状態においてご自身をいけにえとして神にささげて、また私たちのためにとりなしていただきます。「ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです」(ヘブル9章12節)。そして、高い状態としては、昇天し父なる神の右に着座なさって、「キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです」(ヘブル7章25節)。

それで、キリストの体である教会とキリスト者は、真の知識を伝える預言者・義なる王・聖なる祭司という三つの職務を果たす任務が与えられています。「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです」(Iペテロ2章9節)。

教会における預言職とはみことばの宣教であり、王職とは教会を神のみことばに従って正しく治めることであり、祭司職とは教会で聖礼典を正しく執行し、またとりなし祈ることです。また、クリスチャンである私たちは預言者として世に神のみこころを宣べ伝え、王としてこの世界に神のみこころが行われるように行動し、祭司としてこの世のためにとりなし祈り奉仕する責任があります。神は私たちがこれら三つの職務を果たすように命じていらっしゃいます。それは神を愛し、隣人を愛するという大目的を果たすためです。

ハイデルベルク信仰問答

問31 なぜ主は キリスト つまり油注がれた者と呼ばれるのですか。

答 主は、父なる神様から任命され、聖霊によって油を注がれた、わたしたちの最上の預言者であり、また教師であるからです。主は、わたしたちに、わたしたちの救いについての、神様の隠されたみこころとご意志を完全に明らかにされるのです。また、主は、私たちの唯一の大祭司です。そのお身体を、ただ一回限りの犠牲として、わたしたちを救って下さいました。いつも、主の

とりなしによって、父の前にわたしたちの代わりに立たれるのです。また、主は、わたしたちの永遠の王です。主は、その言葉と霊とによって、わたしたちを支配され、成し遂げてくださった救いによって、守り、保ってくださるのです。

問32 それでは、なぜあなたは、キリスト者と呼ばれるのですか。

答 なぜなら、わたしは信仰によってキリストの手足のひとつとなるからです。そうなることによりわたしは主に注がれた油の分け前にあずかります。それによって、わたしもまた、主のみ名を告白して、わたし自身を、主に、生きている感謝の献げ物として献げるのです。そしてこの世では自由な良心をもって罪と悪魔とにたいして戦い、将来においては永遠に主と共にすべての被造物を支配するのです。

V 二つの創造記事

1 環境破壊の歴史とその元凶は？

「キリスト教文明は環境破壊をしてきた。キリスト教は、人間に自然界を支配する権利があると教えているからである。それに引き換え、自然宗教は人間は自然の一部であると教え、自然に対する畏敬を教える。環境問題の深刻な今日、自然宗教に学ぶべきである。」

この手の主張を知識人がテレビや新聞で語るのを聞いて、居心地の悪い思いをしたキリスト者が多いのではないのでしょうか。リン・ホワイトという人が1967年に発表した「現在の生態学的危機の歴史的根源」という論文を発表してから、ほとんど検証されることなく多くの人々がこの仮説を引用してきました。同様の主張がしばしばされるので、ほとんど常識のようになっている観がなくありません。しかし、この「常識」は事実なのでしょうか。

素朴な問いを、読者にしてみたいのですが、あなたは仏教徒だったときは、ハイキングに行くと山にゴミを捨てなかったけれど、クリスチャンになってからゴミを平気で捨てるようになったのでしょうか？神社参拝をしていた頃は高山植物を踏みつけなかったけれど、クリスチャンになってから平気で踏みつけるようになったのでしょうか？むしろ、逆ではないのでしょうか。神様がくださった自然界ですから、たいせつにしようと思えるようになったのではありませんか。

キリスト教が環境破壊の元凶であり自然宗教は環境を保全するというリン・ホワイト以来の主張は、歴史の事実に基づいた主張ではないことが、今日では研究者たちの間で認められてきています。史上最初の環境破壊はもろもろの神々を崇めていた古代メソポタミアで起こっています。メソポタミアは、かつては豊かな森でしたが、放牧地や農地を求めて森が切り開かれ、その結果、森林の蒸散作用がなくなったので雨雲ができず、雨が降らなくなりました。そこで、チグリス、ユーフラテス川から灌漑をしました。ところが、川の水

には岩塩が溶け込んでいるため、やがて農地は塩害で草も生えない荒地となってしまったそうです。大規模な灌漑農法が農地に塩害をもたらすことは、今現在、アメリカ、オーストラリアが経験しつつあることです。農業には雨水が理想的なのです。

それはさておき、儒教や道教や仏教の国、中国でも北方の騎馬民族を防ぐために万里の長城を築くため膨大な量のレンガを造るために広大な森が消失しました。その跡がゴビ砂漠だということです。

西欧での森林破壊を話題にする人は、森林に住むケルト人やゲルマン人を改宗させようとしたキリスト教の宣教師が彼らのあがめる巨木を切り倒した例をあげます。彼らは巨木を神と恐れて動物や子どもをいけにえにささげていたので、そういう迷信から解放するためのパフォーマンスでした。しかし、これは森林破壊というレベルのことではありません。

実際に、西欧で森林破壊が起こったのは12世紀の農業革命のときでした。当時は温暖化と、耕作具の工夫や三圃制といった工夫で農地が急速に拡大しました。鬱蒼とした森に覆われていたヨーロッパは、今日見るように緩やかな丘陵に畑がひろがり、ところどころに林が見える風景に変わりました。西欧での次の環境破壊は16, 17世紀専制君主たちの建艦競争によります。一つ軍艦を造ると一つ森が消えたといえます。軍艦は植民地争奪戦の道具でした。そして18世紀の産業革命以後は世界中で環境破壊がひろがりました。

環境破壊は宗教を問わず、経済第一主義によって行なわれて来たのです。度を越した欲望、つまり第十戒「むさぼりの罪」こそ環境破壊の元凶なのですからキリスト教徒も他宗教も環境破壊に無頓着であったという責任はあったとは言えるでしょう。

2 一つ目の創造記事にこめられた神の意図

創世記には、1章1節から2章3節までと、2章4節から25節までの、趣のことなる二つの創造記事があります。二つの創造記事は別の資料に基づいているとか、両者には矛盾があるという議論を展開することは、「聖書はすべて神の靈感によるものである」と信じる私たちにとっては、ほとんど無意味です。むしろ肝心なのは、神が何を意図されて、記者にこの二種類の創造記事を載せさせたのかと問うことです。

創世記記者モーセが執筆当時想定した直接の読者はだれでしょうか。イスラエルの民です。彼らの生きた時代、オリエントでは自然界のありとあらゆるものが神々として礼拝されていました。太陽、月、星も、大河ナイルも、大木も、空を飛ぶ鳥も、地に群れる野獣たちも、地を這うフンコロガシという昆虫までも神々として礼拝されていました。そういう世界に住む読者に対して、創世記第一章の記事は二つのメッセージを明確に語っています。第一は、これらの自然界のもろもろのものたちは、すべて創造主の作品であるから、それなりの価値があるが、神々ではない。創造主のみを礼拝せよということ。第二は、人間は創造主のかたちにしたがって造られた者であるのだから、被造物に支配されているかのように被造物崇拜といった愚かしいことをしてはならない。むしろ、神の作品であるこ

れら被造物を正しく治めなさいということです。

実際、今日でも、環境問題に取り組んでいる人々の多くが自然宗教に陥っています。「地球は母なる神ガイアです。母なる神を苦しめてはいけません」といって、世界中でおまじないしているニューエイジャーたちがいます。ちなみにガイアとはギリシャ神話の大地母神の名です。

たしかに、人間は被造物であるという点で、他の自然界のものたちと同じですが、同時に、人間は神のかたちにしたがって造られているという点において、他の自然界のものたちと区別され、それらの上に立てられているのです。石や大木や動物や太陽などにひれ伏してはなりません。それはサタンの罠です。

3 二つ目の創造記事

創世記第二章の創造記事は、神の息を吹き込まれ神のかたちにしたがって造られた私たち人間が、どのように神に託された被造物世界を治めるべきなのかということが、もう少し具体的に記されています。

第一は、私たちはこの世界に神が用意された可能性を開発利用してよいのだということです。新改訳聖書は2章5節を「地には、まだ一本の野の灌木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである。」と正確に訳しています。ポイントは末尾の「からである」です。人間が土地を耕してこそ、この世界はそのうちに創造主が秘めたもうた可能性を発揮することができるという意味の「からである」でしょう。また、2章11—12節に金、ベドラハ、しまめのうといった地下資源について触れられているのも同じ意図でしょう。

第二は、15節「神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。」です。神は私たちに、地を耕すとともに、これを守ることを命じていらっしゃるのです。被造物世界を耕して作物を実らせてその可能性を引き出すとともに、これを守ることが私たち人間の任務です。

このように二つの創造記事は、それぞれ自然崇拜の罠に陥るなという警告と、自然破壊の禁止と保護・管理について教えています。

VI 食べること

1. 草食のライオン

神は動物と人間を造ると、すぐに食べ物の心配をしてくださいました。「見よ。わたしは、全地の上にあつて、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる。また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」（創世記 1:29, 30）興味深いのは、創造の初めには肉食獣はおらず、みな穀物食、草食だったということです。

肉食が許可されるのは、大洪水直後のことです。神はノアに言われました。「生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。」（創世記 9:3）おそらく大洪水後、自然環境が激変したために、もはや植物だけでは十分に栄養を摂取できなくなってしまったので、神は人間に肉食を許されたと考えられます。

もともと、人類の墮落後、大洪水以前にもすでに野獣や神を恐れない人々のうちには神の許可を待たないで、すでに肉食をしていた者がいたかもしれません。というのは、人類の墮落後、大洪水前すでに被造物は人間の墮落ゆえに呪われて本来的な状態でなくなってしまったからです。「土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。」（創世記 3:17）

動物の食性は、その歯列に現われています。ゾウや牛は草を食べるための臼歯しかありませんし、ライオンやトラは肉を食べるためにすべてが犬歯です。墮落前はすべての動物が草食獣でしたから、当時のライオンやトラの歯はギザギザではなくて、獅子舞の歯みたいに四角い前歯や臼歯だったのだと想像すると愉快です。イザヤが描く終末の国では、肉食獣が草食にもどって平和に暮らすとあります。「狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。」（イザヤ 11:6, 7）わらを食べてからだを維持できるライオンは、きっと馬や牛のような歯列と消化器官を持っていることでしょう。

牧場で牛や羊が草をはんでいるのを眺めれば、「のどかだなあ」とあくびが出ます。けれども、ヒヒがヒョウに追いつかれて恐怖の形相で咽笛にかぶりつかれて、腹を食い破られ、血まみれの内臓を食べられているのを見て「ああ、のどかだなあ」とはどうしても思えません。やはり、肉食は不自然なことだとはるかな記憶の中で私たちは知っているのかもしれません。

2 肉の過食に注意！

人間の歯は成人で三十二本。穀物をこなす臼歯は二十本、野菜を噛み切る切歯が八本、肉を食べるための犬歯は四本という構成ですから、比率でいえば、穀物五：野菜二：肉一

という割合になります。これが人間の食性の現われですから、聖書がいうように、人間は基本的に穀物菜食の生き物であることがわかります。

こうしてみると、戦後、アメリカの影響を受けた現代日本人の食生活は穀類が不足し、肉を極端に食べ過ぎていることは明らかです。肉を食べ過ぎるとどうなるか。山梨県の長寿村鋼原を六十年間追跡調査してきた医学者は次のように報告しています。「食生活が近代化して十年すると発ガンが増える。鋼原でも戦後増えたものは、動物性たんぱく質、脂肪、コレステロールで、肝心かなめの微量ミネラル、ビタミン、植物繊維が半減したという結果が出ました。」（古守豊甫 「長寿村、短命化の教訓」（『土と健康』302号日本有機農業研究会所収）特に日本人は長年穀物菜食を基本にしていたので、植物繊維をこなすために欧米人よりかなり腸が長くなり、胴が長くなりました。腸が長いと腸内に便が残り勝ちになりますが、腸内に残った肉類のかすは異常発酵して発ガンの要因になります。戦後、日本人の間で大腸ガンが増えた理由です。

肉食に偏った食習慣は個人の健康に問題があるだけでなく、世界の飢餓と環境破壊の原因になっています。というのは、たとえば牛肉1キログラムつくるには餌としての穀類が5キログラムも必要だからです。話を単純化しすぎですが、もし人が肉食をやめて穀物をそのまま食べるようにすれば、現状で世界は食糧が有り余っているのです。

近年中国都市部では、食生活が近代化するにつれて、その需要に答えるために放牧地の家畜の数が激増し、本来その土地が養いうる家畜の五倍もの家畜を飼っているのに、家畜が草の根まで食べてしまい、それが急激な砂漠化をもたらしていると報告されています。いわゆる過放牧です。

3 食べてよい物、いけない物

人間は何を食べるべきで何を食べるべきではないのでしょうか。聖書全体を見れば、<人は神が許してくださったものを食べ、禁じられたものを食べてはならない>という原則が貫かれています。まず、先に紹介したように、人間と動物には食糧として植物が与えられました。ですがエデンの園では果樹のうちで善悪の知識の木は禁断とされました。「神である主は人に命じて仰せられた。『あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ。』」（創世記2:16,17）

モーセの時代のレビ記では、食べてよいものが厳しく制限されました。獣ではひづめが割れていて、かつ反芻する牛、羊、ヤギ、鹿などはOKです。馬やろばは反芻しますが、ひづめは割れていないので不可。豚はひづめは割れていますが、反芻しないので不可です。ひづめのない犬・猫・熊などは不可。魚ではうろこがないウナギなどは不可。というわけで、今でも旧約の祭儀律法の下にあるイスラエル人はトンカツ、うなぎ、馬刺などは気の毒なことに食べません。また、昆虫の中でイナゴ・バッタの類は食べてよかったので、バプテスマのヨハネは野蜜とともに、これを常食していました。タイでは普通に昆虫を食べ、日本

でも信州でもイナゴや蜂の子やザザムシを食べますが、時々アフリカなどで大発生して困る飛蝗が食されるならば、飢餓対策になるかもしれません（レビ11章参照）。

新約時代になると、異邦人に福音が提供される時代になったからでしょう。なんでも食べてよいことになりました。ローマの百人隊長コルネリオに会う前に、神は使徒ペテロに地上のあらゆる種類の四足の動物や、はうもの、ハゲタカなどを差し出して、「さあ食べなさい。」と命じて、躊躇するペテロに「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」と諭されました（使徒10章）。

異邦人への使徒パウロは行く先々、異邦人が彼を食卓に招いてくれるとなんでも食べたでしょう。かつて厳格なパリサイ派だったパウロにとって禁欲はたやすいことでしたが、異邦人と同じように、豚肉やウナギなどには相当抵抗があったろうと思います。でも、彼は律法を持たない異邦人には異邦人のようになって（1コリント9:21参照）、トンカツなどを食べたのでしょう。でも恐る恐るトンカツを口に入れてみて、「あれ、食べてみると、意外といけるんだ。いや、うまい。うまい。」と、旧約の食物禁忌から解放して下さったキリストに感謝したかもしれませんね。というわけで、宣教師志願の読者は好き嫌いせずなんでも食べる自己訓練をしましょう。

4 復活後も食べるのか

私たちは復活後、何か食べるのでしょうか。イエス様は復活してこられたとき、弟子たちに腕まくりをしても、足を見せても、ほんとうに復活したと信じてくれないので、そこにあった焼き魚をムシャムシャと食べて見せました。こういうところを見ると、復活のからだになっても食べるということはあるのですね。神学者によっては、これは弟子たちのために特別に食べて見せたのであって、常に食べる必要があるわけではないというのですが、果たしてそうでしょうか？そういう考え方は、霊のみを善とするギリシャ哲学風のおいがします。イエス様に復活のからだがあり、イエス様が復活の初穂であられる以上、私たちが復活のからだを与えられ、食べることもあるのだらうと見るべきだと思います。

「都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。」（黙示録22:2）とありますが、幸いなことにここにはもう善悪の知識の木はありません。そのときには神に背きうるような自由意志ではなく、みこころにかなうことのみを喜んで選択する自由意志が与えられるのです。復活のからだになったら何も食べないのだと主張する学者さんは、がまんして食べないのかもしれませんが、私は十二種類のいのちの木の実を食べます。楽しみですね。

気になることは、イエス様がこのときお魚を召し上がったことです。狼は羊とともに宿るような新天新地の時代のからだでも、魚肉は食べるのかもしれませんが。なにもかも理屈どおりに書かれていないところが、聖書のおもしろいところです。

VII 善悪の知識の木

1 神からの自律という願望

食べるということは、単に肉体的に栄養を取ることだけでなく、聖書の中では人格的な交流の機会として重要視されています。神との交わりを表現する意味で、旧約時代における祭儀の中には神の御前で食事をするということがありました。全焼のいけにえは犠牲をすべて煙にして献身を表現しましたが、和解のいけにえの場合は祭司が一部を食することで神との人格的交わり、和解を表現しました。新約時代における新しい契約のしるしとして定められた聖餐式においても、食卓における儀式とされています。また、主がふたたび来られて御国が完成するときは、世界中の民から選び出された神の民がアブラハムとともに食卓につくと表現されています。

こうしたことを見ると、家庭の形成においても、食卓の交わりは大切なものだということに、気づかされます。単に栄養を補給するためだけに食事をするという忙しい現代人の生き方に染まってしまうことは、神のみこころにかなわないことです。食事の交わりを大切にしたいものです。また、教会における愛餐会というものも、とても大切なことなのです。

こうしたことを考えると、最初の人アダムに神がお与えになった契約のしるしが、善悪の知識の木から食べるなということであったというのは、意義深いことです。昔、郷ひろみと樹木希林が「♪アダムとイブがりんごを食べてから・・・♪」と歌う「林檎殺人事件」という曲がありました。男女の愛のもつれが事件の真相だということで「ああ、悲しいね。悲しいね。」と結ばれました。善悪の知識の木の実といえば、リンゴの絵が定番です。善悪の「悪」と「りんご」がラテン語の同音異義語で malum なので、こういう誤解が生じたのだらうといわれます。

あの木自体に毒があって人が罪に染まったわけではありません。木は蜜柑でも林檎でも柿でもマンゴーでもパパイヤでもなんでもよかったのです。大事なことは、神があから食べてはいけないと禁じられたという事実です。「理屈ぬきで、神が禁じたという理由だけで食べてはいけない。」ということを受け入れるかどうかテストされたのです。それはつまり、私は自分の理屈よりも、神のみことばを尊びますという姿勢があるかないかが試されたということです。神こそ私の主権者であって、私は神にお仕えしますということが求められたのです。

この木が「善悪の知識の木」と呼ばれて禁断とされたことにも、そのことが現われています。神は、アダムに園にあるすべての木をゆだねてくださったのですが、ただこの木だけはお許しになりませんでした。それは、この木が神に属するものであるということの意味していました。究極的な意味で、善悪の知識は神に属しているということです。造り主である神がものごとの善と悪をご存知であり、ものごとの善と悪をお定めになるので

あって、被造物である人間は造り主のお定めになった善と悪とを受け入れて生きていくべきなのだという事です。

だから逆に言えば、善悪の知識の木から取って食べることは、神の主権を侵害することを意味していました。それは「私には神などは要らない。私が私の神なのだ。私がしたいことが善であり、私がしたくないことが悪なのだ。」という自律の意識の表現であり、神への反逆でした。

悪魔は蛇を通して「あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになる」（創世 3:5）と誘惑しました。実際、彼らが木の実を食べた後、神は「見よ。人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。」（創世 3:22）とおっしゃいました。この二つの箇所、**「善悪を知るようになること」**イコール**「神のようになること」**と表現されています。何が善であり何が悪であるかを知り、定めるのは、本来、神のなさることです。ところが、人が、神をさしおいて、自分で善と悪を定めようとするようになったことが、「神のようになった」と表現されているのです。

人間は神に頼らず自分で自分の道を定めて切り開いて生きていくべきだし、そのように生きることができるし、その選択の結果を他の誰かのせいにしてうらむようなことはしないという誇り、これがヒューマンイズムの根本的原理です。ところが、聖書は、「神など要らない。人間は自律する。」という驕りこそ、罪そのものだというのです。神がご自身の栄光のために創造なさった世界から神を追放し、人間の人間による人間のための世界にしようという生き方をすることこそ、アダム以来の罪なのです。

しかし、実際に、神を人間の世界から追い出してしまったら、善悪の絶対的基準というものがなくなってしまいます。結局、だれか他人が決めた社会の善悪に従うか、自分が神になって自分が好むことを善、好まないことを悪にするほかなくなってしまいます。

ドストエフスキーの小説『罪と罰』の主人公の青年ラスコーリニコフは、ケチな老婆を殺害し、わずかな金品を奪いました。老婆殺しの動機はなんだったのでしょうか。彼の老婆殺しの動機は、彼が新聞に投稿した犯罪論とソーニャへの告白のうちに現われています。ラスコーリニコフは、人間は法律にひたすらしたがわねばならない凡人と、自ら新しい法律を立て一切の道徳的規範を踏み越す権利を持つ非凡人とに分けられると考えました。それで、ラスコーリニコフは自分が「ナポレオンであるか、それともシラミにすぎないか」つまり、自分が非凡人か凡人にすぎないかを確かめるために老婆を殺害したというのです。「ぼくはね、ソーニャ、理屈抜きで殺したくなったのだ。自分のために、ただ自分のためだけに殺したくなったのだ。」

「理屈ぬきで」ということばに、神を捨てた人間の悲惨が如実に表現されています。「理屈ぬきで」というのは、自分が神だといいたいのです。私が殺したいから殺した、それ以外の理由は要らないというのです。本来、人が善悪の知識の木から食べてはいけないのが、神の命令以外、理屈ぬきであったのと同じです。ラスコーリニコフは自分を神としているのです。

「自らが新しい法律を定め、一切の道徳的規範を踏み越す権利をもつ」というのは、自分を神とすることにほかなりません。人は墮落したものの、創造主が人の心に律法を刻んでいらっしやるので、ふつうは罪を犯せば良心の呵責に苦しむものです(ローマ 2:15)。けれども、ラスコーリニコフは、神が心に刻んでくださった善悪の基準さえも踏み越えていく非凡な人間となることを望んだのです。

「ラスコーリニコフは小説のなかにしかいないだろう。」昔、この本を知ったとき筆者はそう思いました。けれども、どうもそうではないようです。かつての凶悪犯罪の報道を聞けば、「カネが欲しかった。」とか「かくかくしかじかの理由で、被害者を怨んでいた。」との説明になるほどと納得したものです。ところが、最近の殺人事件での犯行の動機は、「むしゃくしゃしたから。」「別に誰でもよかった。」とといいます。殺人の動機として自分の苛立ちや衝動のほかにどんな理由も要らないというのです。「俺が殺したいから殺した。ほかに何の理由がある？俺が神なのだ。」というのです。善悪の知識の木の実を盗んで以来、人は神になりたいという罪深い情念の虜になってしまったのです。「悲しいね」ではすまない、恐ろしいことです。

2 他律でなく神律

人間の自律が罪だというと、人間は他律的に生きるべきだということになるのかというとそうではありません。聖書はキリスト者の救われた歩みには、自由という賜物が伴うと教えています。

「3:17 主は霊である。そして、主の霊のあるところには、自由がある。3:18 わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである。」(2 コリント 3:17-18)

外的な石の板に刻まれた律法の下にあるかぎり、その人は他律的な状態に置かれ、縛られた状態です。しかし、キリストにあって内側から御霊による再生によってもたらされた命は、人が内側からつまり自発的に神のみこころをなすように導かれるのです。これは他律的 heteronomos ではなく、さりとて自律的 autonomos というのでもないもので、ある人は神律 theonomos ということばを用いました。

<追記> いのちの木

いのちのことば社『新聖書辞典』は「善悪の知識の木」の項で「霊的にこれを理解すれば、いのちの木とは信仰の木であり、神を信じ、神を愛し、神に従う心構えの木であり、善悪の知識の木とは、自分の知恵で何が善で何が悪であるかをわきまえる道徳的判断の木である。」と簡潔に説明しています。本質を突く説明ではないでしょうか。

VIII 悪魔

1 もう一人の役者

世界観というと、神と人間と自然という三者の関係として説明されることが多いのですが、創世記第三章を見れば、もう一人の役者、蛇がいることに気づきます。創世記記者が「野の獣のうちでへびが・・・」と言っていることを見れば、爬虫類のへびを指しているようですが、黙示録記者によってこの蛇は「あの古い蛇」と呼ばれ、悪魔・サタンと同一視されていますから（黙示 12:9）、悪魔が蛇に憑依したと理解するのが妥当でしょう。私たちが問題としているのは、当然、爬虫類の蛇ではなく、悪魔です。悪魔は神の御業を妨害し、人を神に背かせ、あわよくば自分が神のように崇拜されることを欲して、あらゆる手練手管を尽くして人を誘惑します。

聖書を神のことばと信じていない学者たちは、悪魔という観念の起源は古代ペルシャの光と闇の二元論的宗教にあり、それが後期ユダヤ教と原始キリスト教に影響したと言いますが、聖書は旧約聖書巻頭の創世記から、悪魔が人間をたぶらかしたと教えています。

2 悪魔の起源

ところで悪魔はどこから来たのでしょうか。ユダ書に、「また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。」(6)とあります。この箇所から推論すれば、高慢になって罪を犯した御使いのうち、なお暗やみに閉じ込められず暗躍しているのが、悪魔とその手下の悪霊どもなのでしょう。御使いというのは、通常、肉体をもたない人格的被造物です。

なお、イザヤのバビロンの王に対するあざけりの歌の一部（イザヤ 14:12-15）およびエゼキエル 28 章 1-19 節のツロに対する宣告が、悪魔の高慢と墮落を示しているという理解はオリゲネス以来のもので（『諸原理について』 5:4, 5）。また悪魔の別名ルシファーの出典は、ヒエロニムスのラテン語訳聖書ウルガタのイザヤ書 14 章 12 節「明けの明星（ルチフェル）」です。

3 悪魔の策略

さてエデンの園で悪魔が女の心の内に神のことばに対する疑念を生じさせると、女は神のことばを取り除いたり、付け加えたりしてしまいます。彼女は善悪の知識の木に関して、あたかもその木に魔力があるかのように「それに触れてもいけない」と付け加え、「必ず死ぬ」とおっしゃったのに、「あなたがたが死ぬといけないからだ」とぼやかしたのです。

女がひっかかったと見た悪魔は「あなたがたは決して死にません。」と神を嘘つき呼ばわりし、「あなたがたがそれを食べるその時、・・・あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」と神をケチン坊呼ばわりします。すると悪魔のことばに乗せられた女の内にむくむくと肉の欲・目の欲（好奇心）・虚栄心という三つの邪欲がわき上がってきました。「そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。」（創世3:6）そして、食べてしまいました。そればかりか、悪魔の手先となった女は、夫を誘惑し夫もまた木の実を食べてしまいます。

悪魔の策略の一つは、神のことばへの疑いを生じさせ、欲望を刺激し、誘惑に陥った人を手先として用いることでした。悪魔は神のことばを知っていて、それを神を愛さない動機でもって利用しようとします。荒野の四十日のときも、悪魔は詩篇のことばを引用して主イエスをたぶらかそうとしました。悪魔は神の言葉をよく知っていて、それを捻じ曲げて使うのです。

悪魔の策略についてもう一つ創世記3章から学んでおくべきことは、悪魔は私たちを誘惑するけれども、実際に罪を犯してしまうのは私たち自身であるということです。神に問い詰められた時、アダムは「あなたが私のそばに置かれたこの女が」と言い訳をし、女は「蛇が・・・」と言いました。あとき、悪魔は「大成功！」とほくそ笑んだに違いありません。たしかに悪魔の誘惑はありますが、罪を犯したとしたら、「それは私の責任です」と神の前に認めて告白することが肝心です。そうすれば、悪魔の策略は破れるのです。

悪魔の策略について、もうひとつ心に留めておきたいのは、C. S. ルイスのことばです。「悪魔に関して人間は二つの誤謬におちいる可能性がある。その二つは逆方向だが、同じように誤りである。すなわち、そのひとつは悪魔の存在を信じないことであり、他はこれを信じて、過度の、そして不健全な興味を覚えることである。悪魔どもはこの二つを同じくらい喜ぶ。すなわち、唯物主義者と魔法使とを同じようにもろ手を挙げて歓迎する。」

4 異教と悪魔

現代は「ふもとの道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな」という宗教的多元主義が流行する時代です。しかし、大事なことは聖書が教えていることを明確にしておくことです。新約聖書の時代のヘレニズム世界の宣教の現場、また、キリスト教が公認される以前のローマ帝国は、「宗教的多元主義」の世界であり、現代世界の宗教事情と類似していました。アレクサンドロス大王がインドの西北部にまで軍を進めて広大な版図を手中に収め、ヘレニズム世界を成立させて以来、各民族がもっていた諸宗教も融合することになりました。ヘレニズム世界を相続したローマ帝国においても同様の宗教事情でした。ローマ帝国は支配下に入れた諸国の宗教に対して基本的に寛容政策を取りました。そうして、それぞれの宗教における神々はローマ民族が古来もっていた神話の神々のそれぞれの民族における現

れであるという立場を取りました。たとえば、ギリシャ神話のゼウスはローマのユピテルに、アフロディテはウェヌスにあたるというように教えました。いわゆる本地垂迹説です。ローマのパンテオン神殿には世界中の八百万の神々が祭られます。それらを尊重することが信心深いこととされたわけで、こうした神々を敬わないキリスト教徒は古代においては「無神論者」として非難されることになりました。

こうした世界に福音を宣べ伝えていった使徒たちは、これら異教の神々についてどのように教えているのでしょうか。使徒たちは各地で魔術師や占い師の妨害を受け、アルテミス神殿がそびえる偶像の都エペソでは神殿模型屋つまり神棚屋から迫害を受けました(使徒19:23-28)。パウロは、不従順な異教徒のうちには「空中の権を持つ支配者」つまり悪魔が働いていると明言し(エペソ2:2)、我々の敵は人ではなく、悪魔・悪霊どもであると教えています(エペソ:11,12)。キリストの受肉を否定する異端運動、グノーシス主義も悪魔・悪霊に由来するものであると断言します(Iヨハネ4:1-3)。

悪魔と悪霊どもは「いと高き方のようになろう」とした者ですから、諸宗教の本尊になりすまして、拝まれて嬉しがっているのでしょう。偶像の神々にささげものをすることは、悪霊にささげられているのだとパウロは指摘しています。「私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像の神にささげた肉に、何か意味があるとか、偶像の神に真実な意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。いや、彼らのささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。」(1コリント10:19,20) 私たちは偶像崇拝を避けるべきです。

5 国家権力と悪魔

さらに聖書は悪魔を「この世を支配する者」(ヨハネ12:31,14:30)、「この世の神」(IIコリント4:4)とさえ呼んで、悪魔がしばしば国家権力を利用することも示しています。イエス誕生に際して悪魔はヘロデ大王のうちに働いて、イエスを殺そうとしました(マタイ2:1-16,黙示録12:4)。もともとローマには皇帝礼拝の習慣はありませんでしたが、オリエントの国々では王を神として崇める宗教性がありました。たとえばエジプトではファラオは太陽神ラーの息子、現人神とされていました。ローマ帝国がオリエント世界を包み込むうちに、こうした王の神格化がローマ帝国に取り入れられるようになり、アウグストゥスの時代から皇帝崇拝が行われることとなります。古代教会は皇帝礼拝の強制で苦しみましたが、皇帝に権威を与えたのは竜すなわち悪魔であると聖書は、その黒幕をあきらかにしています(黙示録13:1-10)。主の再臨がごく近くなると、悪魔は「不法の人」「滅びの人」と呼ばれる天才政治家を立てて、世界を惑わし、神の民を迫害すると告げています。その天才政治家は得意の絶頂になると、自分を神と宣言して、他宗教をすべて禁止すると予告されています(IIテサロニケ2:3-10)。

私たちは権力者たちが悪魔に支配されてしまうことがないように、とりなし祈る務めが

あります。そうしなければ、悪魔は彼らを用いて神の民を弾圧し、私たちは敬虔に平和で静かな生活をするのがむずかしくなるでしょう。「そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。」（1テモテ 2:1,2）

6 しかし、悪魔も神の支配下にある

しかし、聖書は悪魔も神の支配下にあると教えます。神は人間が墮落すると、蛇への裁きを宣告し、その中で「女の子孫」の「蛇の子孫」に対する最終的勝利を予告されました。「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」（創世 3:15）ヨブ記 1 章で、サタンは御使いたちのうちに立ち混じって神の前に出ています。サタンは、神の許可なくしてヨブを試みることはできません。サタンは神の主権下に置かれているのです。サタンは神と対等ではありません。悪魔が対等に戦うのはせいぜい善き天使にすぎません（黙示録 12:7）。サタンは自らを神と対峙する者として振舞いわれわれを欺くのですが、聖書的な観点からすれば、サタンの対峙者は神ではなくミカエルなのです。この点、リベラルな学者たちが聖書にある悪魔の教えはペルシャから入り込んだのだというのは的外れです。聖書における悪魔の位置づけは、善と悪が対等であるとするペルシャ的な二元論的宗教とは、まるで異質です。というわけで、なんでも合理的に説明したがるリベラルな学者たちは、すでに悪魔の策略に陥ってしまっているのです。

7 イエスの宣教の妨害と神の知恵

イエスが公生涯にはいると、悪魔は荒野で誘惑します。この試みはエデンの園の試みと対応しています。アダムは人類の代表として、エデンの園という好条件下で悪魔の三つの邪欲にかかわる誘惑にあって敗れましたが、イエスは荒野という悪条件下で、第二の人類の代表として誘惑に臨まれました。悪魔は石をパンに変えよと肉の欲を誘い、高所から飛び降りよと目の欲を刺激し、国々の栄華を与えよと虚栄心をくすぐりましたが、イエスは勝利しました。

イエスに誰より先鋭に敵対したのは、宗教的指導者たち特にパリサイ派でした。イエスはパリサイ人を「蛇ども、まむしのすえども」（マタイ 23:33）と呼んで、彼らの偽善的宗教性は悪魔に由来し、彼らのはあの「へびの子孫」（創世 3:15）であることを暴露します。神の御子を憎んで十字架に磔にした首謀者は、祭司長一派と律法学者たちでした。また、悪魔はイエスの弟子にも働きました。ユダはサタンに心奪われて敵にイエスを売ってしまいます（ヨハネ 13:2,27）。悪魔は人間を用いて神の御子を十字架に磔にするという最悪の業を

なしとげたのです。

しかし、神の知恵は悪魔の知恵をはるかに凌駕していました。神にとっては、悪魔によるゴルゴタでの最悪の仕業は、人類を罪の呪いから救出するためのご計画の成就でした。神の知恵はなんと底知れず深いことでしょう！

IX いちじくの葉と皮衣

1 いちじくの葉

「人間が他の動物と違う点はなんでしょうか？」といえ、
「それは人のみが神のかたちである御子に似た者として造られたことであり、神の像とは知・義・聖です。」ですが、今回はもっと身近で目に見える人間の特徴について学びましょう。それは、人だけが着物を着るという点です。最近ではペットブームで服を着せられた犬を見かけますが、あれは人によるお仕着せにすぎません。

「ミノムシはどうですか。」という人がいるかもしれません。ですが、ミノムシが着物をつけるのと、人間が着物をつけるのは目的が異なります。ミノムシにとって着衣は風雨や日照りや外敵から身体を守るためでしょうが、人間にとって着衣の第一義的な目的はそうではありません。それは、常夏の島に住む人々でも、ごく一部の裸族は例外として、みな腰におおいを着けることからわかります。なぜ人間は腰おおいをするのでしょうか。人間の着衣の習慣の始まりについて、創世記は次のように語っています。

「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らはいちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」
(創世 3:7)

人は裸を恥じるから着物を身に着けます。食べたのは口ですから、マスクでもすればよかったのに、彼らは腰をおおったのでした。それは性器を隠すためでした。アウグスティヌスは『神の国』第十四巻で、性欲との関連でいちじくの葉を解釈しています。以下、その記述を紹介しましょう。

神に反逆する前、最初の夫婦は、お互いに裸を恥ずかしいと思いませんでした。それは、彼らが自分たちの裸に気づかなかったからではなく、裸がまだ恥ずべきものとなっていなかったからです。というのは、墮落前は情欲が彼らの意志に反逆して、性器を動かすようなことがなかったからです。ちゃんと時と場合と相手をわきまえて、自分の意志で性器をコントロールすることができたのです。しかし、人が神に反逆し、神の恵みを取り去られたとき、それまで意志の統御に服していた性器は、情欲に捕えられて、本人の意志に反して振舞うようになってしまいました。以来、人は「だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」(マタイ 5:28)という戒めにおののき、「私には自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。」(ローマ 7:15)と嘆かねばならない者とな

ってしまったのです。

人間は、サタンに誘惑され、神に背を向けて「神のようになれる」と期待して善悪の知識の木の実を取って食べました。けれども、その結果は、自分自身の性欲さえもコントロールできない惨めな者に成り下がってしまうということでした。人は肉欲の奴隷になってしまったのです。だから最初の男女は狼狽し、いちじくの葉で性器を隠すようになり、その子々孫々も着衣という習性をもつことになりました。

けれども、いちじくの葉など、日差しの下で数時間もすれば枯れて、また恥が露出してしまいます。いちじくの葉は、自力で己が罪と恥を覆おうとする自力救済の偽善的努力のむなしさを象徴しているといえましょう。

2 皮の衣

神はいちじくの葉に代えて、獣を殺して作った皮の衣を彼らに用意してくださいました。「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」(創世3:21)この箇所は、いわゆる神人同形論のように映るので、それを警戒して、「神が、あたかも毛皮商人や仕立て屋のように、獣を殺し毛皮をなめして縫い合わせて皮の衣を作ったということではなくて、そうすることを人間に許可したという意味である」という聖書注解が多いようです。

しかし、このような解釈では、「神が彼らのために皮の衣を作って、彼らに着せてくださった」という記述に現れた驚くべき神の恵みが見えなくなってしまいます。創世記第三章は、「そよ風の吹くころ園を歩き回られる神」というぐあいには、あたかも浴衣に下駄ばきで団扇を片手に散歩していらっしゃるような風情で神のふるまいを表現しているのですから、この箇所もまた神が手ずから、罪に落ちて裸を恥じている罪人夫婦のために皮衣を作ってくださいったという表現を素直に読み取ればよいのです。いちじくの葉が自力を表すとすれば、皮の衣は神による恵みを表現しています。

では、いちじくの葉と皮衣はどちらがうのでしょうか。「鬼のパンツはいいパンツ ♪強い ♪強い ♪トラの毛皮でできている ♪」という歌のように、皮衣はすぐに枯れるいちじくの葉に比べればうんと丈夫で長持ちします。それは神の恵みの永続性を象徴するといえましょうが、それ以上に、皮衣を作るためには生き物の血が流された点が肝心です。「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」(ヘブル9:22)とあります。神が罪人に着せてくださった皮衣には贖罪の祭儀的意味が読み取られるべきでしょう。

ここにいけにえの祭儀と、その彼方のキリストの贖いの予型を読むのはうがちすぎだと思ふきもあるでしょう。しかし、文脈をじっくりと見ますと、読み込みとはいえません。このときアダムとエバのために史上初めて動物の血が流されたのです。というのは彼らはまだ肉食をしていなかったからです。その血を流された動物の衣で自分の裸の恥が覆われたとき、彼らは大きな衝撃とともに、自分たちの恥を覆うには動物の血が流されねばならないのだと認識させられました。神は「それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」

(創世 2:17)と言われたのに、殺されたのは自分ではなくこの動物であり、その動物の皮をもって恥が隠されるという体験をして、その動物が自分の身代わりとなったということに悟らなかったと考えるほうがよほど無理な解釈です。

罪深い裸の恥をおおう衣の意義は、創世記を記したモーセの祭儀律法における祭司の衣に継承されていきます。祭司が聖なる神の前に出るために、特別の衣を着ることが求められました。特に、「裸をおおう亜麻布のももひき」(出エジプト 28:40-42)という表現があります。

そして、新約にいたってキリストが私たちの罪のために血を流して死なれ、その血潮によって私たちの罪と恥が覆われたのです。人は自前の義ではなく、神がキリストにあって恵んでくださった義によって神の御前に罪を赦されます。私たちは自力の道ではなく、恩寵の道で救われます。私たちは自前の偽善の衣を捨てて、「キリストを着る」(ローマ 13:14)べきです。王子の婚宴に招かれた客が追い出されたのは、会場入り口で与えられた礼服を拒否して自前の服を着て席についていたからでした(マタイ 22:11-13)。

神の御前では、自分の過ちを言い訳や偽善で取り繕っても無益です。いちじくの葉は強い日差しにしておれてしまいます。神のくださる義の衣を着ましょう。自力の道を捨て、おのれの罪と無力を大胆に告白して、子羊イエスが流された血潮によって罪を覆っていただくではありませんか。

X 下剋上

1 からだの中で

「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らはいちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」(創世 3:7)

善悪の知識の木の実を食べたとき、アダムと妻は裸を恥じて性器を隠しました。神に従順であった時、性器は意志の統御の下にあって正しく機能していましたが、アダム夫婦が神に反逆したとき、性器は意志に反して勝手に振舞うようになったからです。下位にある肉体が、上位の意志に反逆するという、人の内面における下剋上です。

人は自分の意志で肉体を制御できなくなりました。アウグスティヌスはこの事態を「不従順が不従順という罰をもって叩き返された」と表現しています(『神の国』14:17)。神への不従順な意志が、肉体の不従順という罰を受けたのです。それ以来、人は、意志と肉体の相克のゆえに肉欲主義と禁欲主義の両極端を右に揺れ、左に揺れています。

2 家庭の中で

現代は、家庭の中で夫と妻の間に上下関係があるとか、親と子どもの間にも上下関係があるなどという、時代遅れの差別主義者だと袋叩きにされてしまいそうな世の中です。

けれども、聖書はどう教えているのでしょうか。

親子関係について、聖書は「子どもたちよ。主にあつて両親に従いなさい。」（エペソ 6 : 1）と命じています。主は、親に子どもを保護・監督する任務と権威を授けていらっしやいます。

また、聖書は妻たちに次のように命じています。「妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。」（エペソ 5:22）主は夫に、妻を愛し導く任務と権威をお与えになっているのです。

ただし夫が暴君でよいと言っているのではありません。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」（エペソ 5:25）とあるように、夫は神から授かった権威を、キリストのような自己犠牲の愛をもって用いなければなりません。「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。」（マルコ 10 : 43）主イエスは、夫に対して仕えるしもべの心をもったリーダーシップを命じているのです。

妻が夫に従順であれば、夫は妻を愛しやすくなり、夫が妻を愛をもって導けば、妻は夫に従順でありやすいでしょう。そこに好循環が生じます。そこで、結婚を考えている女性に勧めたいのは、「尊敬できる人を夫として選びなさい」ということです。尊敬していない人に従うことは難しいからです。男性としては、みことばにしたがって尊敬に値する人となるように自己訓練することがたいせつです。

ところが、人が神の権威に背いたとき、夫婦の秩序は異常を来たしました。神は妻に次のようにおっしゃいました。「あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」（創世 3:16）ここでの「恋い慕う」ということばは、第四章における神のカインに対する警告の中でも用いられていることばです。神は奉獻物のことで罪を犯したカインに対して警告なさいました。「罪は戸口で待ち伏せしてあなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」と。罪が悪女に譬えられています。これは言い換えれば、罪はあなたをとりこにしてあなたを支配してしまおうとしているぞという意味でしょう。ちょうど悪女デリラがサムソンを誘惑し滅ぼそうとしたような恋い慕いかたといえましょうか。そのように、墮落後、妻が夫を恋い慕うというのは、妻は夫の自分に対する権威を認めず、逆に自分の思うままに夫を操りたいという欲望を抱くようになってしまったという意味であると解釈されるところです。夫婦の間にも、下剋上が生じたのです。

しかし、妻が夫のいうことにことごとく反対すればするほど、夫は暴君になります。それでももし妻が夫の権威をないがしろにするならば、そのうち夫は「おまえの勝手にすればいい。」と無責任になってしまいます。＜愛と従順＞という夫婦の好循環は、＜暴君的支配と奴隸的服従＞の悪循環、または＜無責任と不従順＞という悪循環に変質してしまうのです。最初の夫婦以来そのような悪循環に陥ったのです。

3 自然と人間

さらに、自然界も人間に対して反逆するようになりました。神はアダムにおっしゃいました。「土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。」(創世 3:18)

本来、人間には、神の権威の下で、善い王として自然界を支配する務めがありました。「神は彼らを祝福された。・・・地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」(創世 1:28)けれども、神の権威を拒否した人間は、自然界から王としての権威を拒否されたのです。「不従順が不従順という罰をもって叩き返された」のです。いばらとあざみ、病害虫は農夫を苦しめ、野獣たちは人間を襲い、微生物は変異して病気を発生させるようになりました。

人間はこうした自然の猛威に対して長い期間なすすべがなく、ひたすら自然界のもろもろのものを神々として恐れて拝むようになりました。雷に震え上がり、太陽を拝み、氾濫を恐れて川の神の祠にひざまずき、手当たりしだいあらゆる物を神々として礼拝するようになってしまったのです。

しかし、ここ二百年ほど前から、人間は文明の力で自然界を圧倒するようになり、今度は自然界を暴君的に支配するようになりました。しかし、そうした暴君的な文明のありかたが環境破壊を起こし、いまや地球は危機的状況になっています。

4 権威と服従

今日私たちが直面している地球環境の破壊という大問題も、家庭崩壊や人間の内面の抑えがたい肉欲にまつわる苦悩も、その根は同じ罪であると聖書は述べています。それは人間が思い上がって創造主の権威に従うことを拒否した罪です。現代では権威とか服従ということば自体、忌み嫌われる風潮が強く、むしろ反逆者が英雄視される時代です。

しかし、私たちキリスト者は、悔い改めて新生した者として、敬うべき人を敬うように生き方を変えることが必要です。そこに神の望まれる秩序と平和の回復が生まれます。

「すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。」(ペテロ 2:17)

X I 二人のアダム

1 アダムとイエス

神は二人の代表者によって、人類をお取り扱いになります。ひとは人類の始祖アダムであり、もうひとはイエスです。そこでイエスを第二のアダムと呼ぶことがあります。この二人の代表者のいずれに属するかによって、その人の永遠の運命は決まります。アダムに属する者は滅び、キリストに属する者は永遠のいのちにはいます。

アダムと妻は、エデンの園という最良の環境で、ただ「園の中央にある善悪の知識の木から取って食べてはならない。」という禁令を受けました。もし、彼らが神に従順であったなら、神はさらに完全な祝福を彼らとその子孫たちに与えたことでしょう。古代教父エイレナイオスによれば、時が来て人となられた神のことばイエスは、神が人をご自分の像に似せて創造なさったときの「神のかたち」です（創世 1:27、ピリピ 2:6）。アダムとエバがもし誘惑に陥らなかったなら、さらに御子の像を完成させた者となったはずでした。けれども、彼らが神のご命令に背いたので、世界に罪と死が入ってしまいました（ローマ 5:12）。罪というのは、神の前において法的に罪責があるという意味と、性質として罪（罪性）があるという意味です。そして死というのは、もっとも本質的な意味では神との分離を意味しています。

しかも、アダムは人類の代表でしたから、その子孫はすべて生まれながらに彼の罪を受け継いでいます。「ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。」とダビデが嘆くとおりに（詩篇 51:5）。親は子に「嘘をつきなさい」とは教えませんが、子どもは必ず嘘をつくようになります。親は子どもに「意地悪をしなさい」とは教えませんが、子どもは意地悪をするようになります。生まれながらに罪がその中に宿っているからです。すべての人は、この原罪を背負って生まれてきます。幼いときには、それが種の状態ですが、やがて罪の芽を出し、罪の花を咲かせ、罪の実を結んでしまいます。

「アダムとエバがもし誘惑に陥らなかったなら、さらに完全に御子の像に似た者となったはず」というのは、墮落前の彼らの状態は「罪を犯しうる罪なき状態」だったのですが、最終的な救いの完成においては、「罪を犯しえない罪なき状態」としていただけることを意味しています。その日には罪に悩まされることはなくなります。それはなんと幸いなことでしょうか。

2 エデンの園で

悪魔は人の欲につけいって罪へと誘いました。「そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。」とあります（創世 3:6）。

「食べるのによく」とあるように、一つは「肉の欲」つまり肉体的な欲への誘惑です。女は食欲をそそられて、罠に陥りました。そして、彼女だけでなくアダムも、彼らの子孫もみな肉の欲への誘惑に敗れてきました。姦淫も暴飲暴食も肉の欲の暴走です。

また、木の実「目に慕わし」かったとあります。「目の欲」への誘惑です。アウグスティヌスによれば、目の欲とは好奇心です。女は「なんだか面白そうだわ。食べたら、いったいどうなるかしら？」と好奇心をそそられたのです。好奇心は、限度内では良いものですが、限度を越えると罪になります。たとえば、麻薬をやれば身の破滅だと知っていながら、好奇心からやって滅びてしまう人たちがいるでしょう。

また、禁断の木の実には「食べれば賢くなる」という点で魅惑的でした。悪魔は「あなたが神のように賢くなれる」と誘ったのです。人が「神のかたち」として、自分と隣人の尊さを知ることは健全なことです。しかし、神に背いて、神のようになろうと願うことは傲慢であり虚栄です。人は傲慢と虚栄によって悪魔の罠に陥ってきました。悪魔は肩書きや地位や名誉を餌として、私たちに滅ぼそうとするのです。

3 荒野で

人類の代表アダムはエデンの園という好条件下で悪魔の試みに負けましたが、イエスは人類の第二の代表として、荒野という悪条件下で悪魔の試みに勝利を得てくださいました。悪魔は腹ペコのイエスに対して、「肉の欲」を刺激する誘惑をしました。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」（マタイ 4:3）しかし、イエスはお答えになりました。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある。」（マタイ 4:4）神は、神の義を第一に求める者には、神の義に添えて食べ物も着物も与えてくださいます。

悪魔はイエスに「目の欲」つまり好奇心への誘惑をも仕掛けました。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる』と書いてありますから。」（マタイ 4:6）するとイエスは「『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある。」（マタイ 4:7）と言って悪魔を撃退しました。

さらに悪魔はイエスに傲慢と虚栄心への誘惑を仕掛けました。イエスにたとえば中華帝国、インドのマハラジャ、ローマ皇帝の宮廷の酒池肉林・栄耀栄華の幻などを見せて「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」と誘惑したのです。イエスは「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ』と書いてある。」と撃退しました。

こうして、イエスは神の民の代表として荒野における悪魔の誘惑に勝利を収められました。アダムが悪魔の誘惑に敗れて以来、その子孫は一人残らず悪魔の誘惑に勝つことができませんでした。ついに神の御子イエスが人として来られて、悪魔の誘惑に対して勝利を収めてくださったのです。荒野の出来事は、その悪魔に対する戦いの発端であり、主イエスは最終的には十字架の死と復活によって、勝利を獲得なさいました。主イエスはおっしゃいました。「わたしはすでに世に勝ったのです。」（ヨハネ 16:33）

日本人は日本代表のチームが世界大会で勝利を収めたら「やったー。勝った。」と喜ぶでしょう。なぜですか。彼らが日本代表なので、彼らの勝利に日本人の私たちもあずかるからです。主イエスは神の民の代表として悪魔の試みに勝利を獲得されたので、私たち自身は弱くても、悪魔に対して決定的な勝利をすでに得ているのです。頭を踏み砕かれた蛇のからだだが、長い時間のた打ち回っているように、悪魔はすでに主イエスに頭を踏み砕かれても今なお断末魔の叫びを上げながら暴れています。しかし、悪魔の負けはもう決定し

ているのです。ですから、私たちも勇敢でありましょう。私たちは、キリストに属する勝利者なのです。「すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なうものは、いつまでも永らえます。」(1ヨハネ 2:16-17)

X II 神の御顔をあおぎ見る

1 エデンの園で

ある大店（おおだな）の主人に頼まれて、庭師の熊さんは早朝から庭で、一日汗を流して働きます。涼しい風が吹いてくる頃合になると、旦那が団扇でパタパタと懐に風を入れながら歩いてきました。旦那は「いやいや、実にいい按配に整えてくれたね。將軍様のお庭だって、これほど見事にはなっていないでしょうな。さすが熊さんの腕前だ。」「そりゃいくらなんでも、旦那、ほめすぎでさあ。」とか言いながら、熊さんはまんざらでもありません。苦勞し工夫したツボを、この旦那はちゃあんと見抜いてくれて、仕事の価値がわかっているからです。旦那の満足気な顔を見れば、きょう一日の苦勞もなにも吹っ飛んじまうのです。

「そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる」主という創世記3章8節の前半を読むと、こんな風景が浮かびます。あの禁断の木の実の事件までは、一日の仕事が終わった頃、神が園を散歩して来てくださる時が、アダムと妻にとっては何よりの楽しみでした。神は二人にエデンの園の管理を任せ、一日の働きぶりを見て、その労をねぎらってくださるので、神の似姿に造られた人間にとって、本来、神から託された仕事に励み、そして、神とお交わりすること以上にすばらしく心満たす経験はほかにないのです。御顔を拝するこの時こそ、人にとって生きててよかったと思える時でした。創世記の中には、神はアブラハムを旅人の姿をして訪ねてくださったり（創世記 18:1, 13）、ヤコブと相撲を取ってくださったりさえします（創世記 32:22-30）。

「園を歩きまわられる主」というのは、後の日にベツレヘムの馬屋に人として生まれ、庶民の中で生活を営まれた神のお姿の予告編でしょう。

<ブログ版追記>

エイレナイオスは次のように注釈しています。「園がそのようにきれいで優れたものであったので、神の御言葉は定期的にその中を歩いていた。御言葉は巡り歩き、人と語り合うのを恒とした。これは将来起こるはずのこと、つまり御言葉がどのようにして将来人間の仲間となり、人と語り、人類のあいだに来て、人々に義を教えるようになるか、それを前もってかたどっていたのである。」（使徒たちの使信の説明 12）また、アンティオケイアのテオフィロス（180年頃）も「アウトリュコスに送る」第二巻22で次のように言っています。「しかし神はそれによって万物を造ったという神の言葉は、神の力と知恵であり（1コリント 1:24）、宇宙万物の父である主の姿をとるのであって、この言葉が神の姿で園に

現れ、アダムと話したのである。」と。

2 神の御顔を避けて

ところが、禁断の木の実を盗って食べてしまった日、神の御顔はアダムと妻にとって、恐怖の的となりました。今や、彼らは「主の御顔を避けて園の木の間に身を隠さ」なければなりません。喜びは恐怖となりました。神は聖いお方なのに、人は罪に満ちているからです。しかも、神の御顔の前で隠すことができるものは何もないからです。アダムの子孫である私たちも同じ経験をします。神が私たちの心の中に刻まれた正義の基準は厳しいもので、少しでも悪いことをするとピッピーと警報が鳴り、私たちは心の中で必死に言い訳をするのです（ローマ 2:14, 15）。

墮落以来、神の御顔は人にとって恐怖となり、御顔を見る者は死ぬと信じられました（創世記 32:30、出エジプト 3:6、イザヤ 6:5 など）。旧約時代にあっては、親しく神の御顔を見るのが許されている例外はモーセのみでした（民数記 12:8）。罪を犯したら動物犠牲によって罪を贖うことができるという規定がレビ記には定められたものの、旧約の民はそれで自分の罪がきよめられたという確信を得ることはできませんでした。ですから、毎年動物犠牲をささげなければならなかったのです。旧約時代の動物犠牲は、御子の十字架の犠牲という本体を指し示す影にすぎなかったからです（ヘブル 10:1-4 参照）。

「10:1 いったい、律法はきたるべき良いことの影をやどすにすぎず、そのものの真のかたちをそなえているものではないから、年ごとに引きつづきささげられる同じようないけにえによっても、みまえに近づいて来る者たちを、全うすることはできないのである。10:2 もしできたとすれば、儀式にたずさわる者たちは、一度きよめられた以上、もはや罪の自覚がなくなるのであるから、ささげ物をするのがやんだはずではあるまいか。10:3 しかし実際は、年ごとに、いけにえによって罪の思い出がよみがえって来るのである。10:4 なぜなら、雄牛ややぎなどの血は、罪を除き去ることができないからである。」（ヘブル 10:1-4 口語訳）

3 神の御顔を見る祝福の回復

神の御子が人となって私たちの間に住まれ、十字架と復活によって、神との交わりが回復されました。これによって、神の御顔を見るということが祝福として戻ってきました。イエスを信じる者は神の御顔を喜びをもって仰ぐことができるようになったのです。主イエスは山上の祝福において言われました。「心のきよい者はさいわいです。その人は神を見るからです。」（マタイ 5:8）。

私たちは信仰によって神の御顔を見ていますが、それは古代の銅鏡に映すようにぼんやりと見ている状態です。しかし、究極的な祝福にあずかるときには、「顔と顔とを合わせて見ることに」なります（1 コリント 13:12）。

「もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべ

たちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。」（黙示 22:3-4）

XIII 結婚、その祝福と限界

1 「生めよふえよ」

結婚の目的とはなんでしょうか。第一は、創世記第一章で神が最初の夫婦を祝福して「生めよ。ふえよ。」と言われたように子孫を増やすことです。第二に、それは、「地を従え」「海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配」するためでした。

神は、人類が神のしもべとして、被造物世界を治めて文化を形成し、神の栄光をあらわすことを望まれました。文化命令と言います。結婚して子どもを授かり、神を愛する過程を形成することは祝福です。しかし、もし子どもを得ることだけが結婚の主要な目的であり、子どもを得ることによって世界を治めることがさらに上位の目的であるならば、子どもを得られなかった夫婦は失敗ということになってしまいますが、そうなのでしょうか？旧約時代には子を授かることのできない女性たちが、ひどく悲しい思いをしました。また、単に被造物管理が目的の「増産」なのでしょうか？

2 「ふさわしい助け手」

創世記第二章には、もっと詳しく結婚についての定めと教えが記されています。神はアダムにエデンの園を「耕し、守る」という任務をお与えになった後、「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」（創世記 2:18）と、アダムに妻を与えました。この文脈からは、第一章と同じように、「地を耕し守る」ために、助け手として妻をくださったのだと読みとれます。

しかし、アダムにとって妻が助け手であるとは、単に地を耕す労働力としての助け手であることを意味していません。神は最初から、アダムのもとに獣や鳥を連れてこられて、アダムに名前をつけさせました。アダムはこれらに名付けながらも、「ぼくにはふさわしい助け手がないなあ。」と寂しい思いをさせられました。牛馬ならば労働力としての「助け手」にはなりえたのですが、それらは決して「ふさわしい助け手」ではありませんでした。「ふさわしい」と訳されるのは、「差し向かいの」という意味のことばネゲドです。ですから、「ふさわしい助け手」とは、差し向かいの助け手、人格的交流のある助け手、語り合う助け手、心通う助け手、ともに神の前にひざまずいて祈ることができる助け手です。父と子が愛である聖霊にあって交わっていらっしゃる三位一体の神の似姿として造られた男女は、やはり人格的な交わりをして神の愛の共同体をあらわすことを目的として、この世に置かれたのです。

たしかに結婚には、前述のように子孫を増やして、世界管理をする目的もありました。

また墮落後の男女に対しては、「不品行を避けるために、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女も自分の夫を持ちなさい。」（1コリント7:2）と、目的のひとつは不品行の防止だともあります。しかし、究極的で最大の目的は、夫婦が神の前に祈りつつ愛の共同体を築き、被造物を管理することです。

ですから、神は、その「ふさわしい助け手」を造るにあたって、アダムのあばら骨を利用なさいました。夫婦がひとつであることをよくわからせるためです。しかも、その時、神はアダムを深い眠りに陥れてから、あばら骨を取って女性を完成させてからアダムのもとにつれてこられました（創世記2:22,23）。なぜ眠らせたのでしょうか。もし部分麻酔で、女性が造られるプロセスをアダムが見ていたら、なんだかアダムのイメージとして妻はロボットのような物体となる危険があったからでしょう。神は女性を造られる間、アダムに深い眠りをお与えになって、二人が人格的出会いができるように配慮なさいました。

アダムは妻に出会ったとき、感激して史上初のなんとも無骨なラブソングを歌いました。

「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。

これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」（創世記2:23）

3 結婚の究極の目的とその限界

神が最初の夫婦の出会いが人格的な出会いであるようにと配慮をなされたことには、理由があります。それは、結婚というものにこめられた「花婿キリストと花嫁教会の予型」という奥義のゆえでした。新約聖書は次のようにいいます。「『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。』この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。」（エペソ5:31,32）。

あるとき、主イエスはサドカイ派がしかけてきた論争のなかで、「人が死人の中からよみがえるときには、めとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです。」（マルコ12:25）とおっしゃいました。復活の日、新天新地では、結婚という制度はなくなってしまうのです。ですから、「この世では結ばれなかったけれど、あの世で・・・」などというのはかなわぬ望みです。真の神にそむいた人間はなんでも偶像化するので、のぼせ上がって男女の愛、夫婦愛というものを偶像化する場合があります。

けれども、冷や水を浴びせるようですが、御国では神はふたりを結び合わせてはくさいません。男女の愛、夫婦愛もまたその務めが終わったら消え去るものなのです。完全なものが現れたら、不完全なものは消え去ります。なぜ、復活の日に結婚がなくなるのか。それは、花婿キリストと花嫁教会の婚姻という本体が出現するので、両者のうるわしい交わりを指し示す雛形としての男女の結婚という影の必要がなくなるからでしょう。主イエスの十字架の贖いという本体が現れたとき、影としてそれを指し示していた旧約のもろもろのいけにえの儀式が不必要になったのと同じことです（ヘブル10:1）。

それにしても、結婚というものが、終わりの日の花婿キリストと花嫁教会の交わりを指差すものだとして認識したら、クリスチアンの家庭は結婚をきよい愛に満ちたものとするため

にどれほど祈り努めるべきかが実感できるのではないのでしょうか。

「私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。」（黙示録 21：2）

XIV 働くこと、その祝福と呪い

一時期「やりがい」という言葉が流行しました。しかし、小泉・竹中改革以降労働者派遣法改正でワーキングプアが大量生産され、背に腹は代えられなくなって、最近「やりがい」ということばがあまり聞かれなくなりました。しかし、仕事にやりがいを求めることは間違ったことではありません。仕事のやりがいとはなんなのでしょう。

1 ラクだから楽園？

「エデンの園では、人は仕事などせず一日遊び暮らしていても、たわわに実った果物を食べて、ごろごろしていればよかった。エデンの園はラクだから楽園だった。労働なんかしなくてよいのだ。」というイメージを抱く人が多いようです。聖書以外の世界では、労働というのはできればやらないですませたいこととして扱われてきました。古代ギリシャでは労働は奴隷や家畜のすることとされました。パウロがアテネのアレオパゴスを訪ねた時も、ギリシャ人たちは朝から晩まで哲学を論じ合っていました（使徒 17：17-21）。ギリシャ語で労働にあたることばポノスは苦役という意味をあわせ持っています。ラテン語のラボール（英語レイバーの語源）、フランス語のトラヴァーユ、ドイツ語アルバイトにも、やはり苦役という意味が含まれています。ヨーロッパの知識階級は、今も労働を蔑視する向きがあります。

こうした異教的価値観はキリスト教理解にも影響をおよぼして、カトリック教会には色濃く聖俗二元論があります。聖なる務めは司祭職や修道士のみであって、その他の仕事は俗なるものとされているのです。

2 労働は祝福

しかし、聖書によれば、労働は本来、墮落の結果もたらされた呪いではなく、墮落前に神が祝福として人間に与えたものです。労働も本来、聖なるものです。「神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。」（創世記 2:15）伝道だけが神からの任務ではなく、汗を流し地を耕す労働もまた神からの任務なのです。労働の内容は、地を「耕し」かつ「守る」ことである。「耕す」というのは、ヘブル語で、しもべ（エベド）と同根の語「アバド」が使われていますから、言い換えると「土に仕えること」です。田畑の世話をするというニュアンスです。大地の世話をし、これを守るこ

とが労働です。

大規模単作の化学農法について考ましよう。地平線までの畑に、飛行機で化学肥料のみ施し、同じ種をまき、殺虫剤を散布するといったやりかたの農業をすると、最初二年ほどは面白いほど取れますが、まもなく病気が発生します。病気を抑えるために土壌消毒をして土の中の微生物を殺してから種まきをするのですが、地力はどんどん失われます。しかも、地下水を大量にくみ上げての灌漑農法では、地下水に含まれる塩分によって土地は耕作不能になってしまっています。こうして耕作放棄地がどんどん広がっているのです。米国やオーストラリアは土地がいくらでもあるので、次から次に土地を取り替えばよいということなのでしょうが、こうした国々に対抗するために日本でも農業を大規模化すべきだと主張する人々がいます。しかし、日本では農地をひとたび殺してしまったら、もう代わりとなる農地などありません。日本やヨーロッパでは、農地を耕しかつ守る農業でなければならないのです。

土から作物を取ったら、その分は堆肥などで栄養分を返すなり、土を休ませるなりして、連作を避けて輪作体系を組むといった工夫が必要です。旧約聖書の律法には、七年ごとの「安息の年」が定められています。このように土の世話をしてやるのが、「土に仕え、かつ守れ」という神のみこころにかなう農法でしょう。これは農業だけでなく、林業、漁業その他すべての産業において、心すべき態度です。

「イスラエル人に告げて言え。わたしが与えようとしている地にあなたがたが入ったとき、その地は【主】の安息を守らなければならない。六年間あなたの畑に種を蒔き、六年間ぶどう畑の枝をおろして、収穫しなければならない。七年目は、地の全き休みの安息、すなわち【主】の安息となる。あなたの畑に種を蒔いたり、ぶどう畑の枝をおろしたりしてはならない。あなたの落ち穂から生えたものを刈り入れてはならない。あなたが手入れをしなかったぶどうの木もぶどうも集めてはならない。地の全き休みの年である。地を安息させるならあなたがたの食糧のためになる。すなわち、あなたと、あなたの男奴隷と女奴隷、あなたの雇い人と、あなたのところに在留している居留者のため、また、あなたの家畜とあなたの地にいる獣のため、その地の収穫はみな食物となる。」（レビ 25：2-7）

3 労働に呪いが

アダムが神に背いたとき、本来、人に従順であった被造物・大地に呪われ、労働は苦役としての側面を持つようになりました。神は仰せになりました。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。」（創世記 3:17-19 抜粋）

古来、多くの民族において労働という言葉に苦しみという意味が含まれて来たのは理由のないことではありません。今日、過労死の犠牲者がたくさんいるように、人は労働によ

ってからだと心を壊してしまうことが、しばしばあります。他人事ではありません。また、創世記の言うとおり、作物よりも茨やあざみのほうが力が強いのです。

そんな墮落後の世界の現状ではあるから労働は辛い。しかし、神の子であるキリスト者としては、この時代のなかで限界がある中であっても、神を見上げて、一度にすべてではなく少しずつ、本来の祝福としての労働を回復していくことが尊い任務として与えられています。

「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。」(ローマ 8:19)

XV 全被造物の救い

1 犬は天国へ？

「少年は牧師のわきに立って、とても大事なことを尋ねた。『もしイエス様にお願いしたら、犬も天国にいけますか?いい犬だったら?』 牧師はこどもを見下ろした。『犬が?天国に?冗談じゃない。なんてくだらない質問をするんだ。神様はご自分の息を吹き込んで、われわれに命を与えてくださった。われわれが死ねば天国に行くのは、神さまの息、つまり魂だ。』『でも犬だって息をします。きっとからだの中に神さまの息をもってるんですよ』『ぜったいにそんなことはない』(中略)・・・いま、自分のいちばんたいせつな友達を失おうとしている。その友達は、けっして不平を言わないし、裏切らないし、しかっても、ひどいことを言っても愛情で答え、かわいがったり、ほめたりすると、心から喜んだ。教会がのぞんでいる資質は、すべてそなた友だちなのだ。それなのに、ここに立っている教会のえらい人は、少年の忠実な友だちのことを、天国にはいけないという。まったく不公平だ。」・・・C. W. ニコル氏が自らの少年時代を描いた小説『小さな反逆者』の一節です。これは氏をキリスト教嫌いにさせた決定的出来事となりました。

ところで、この牧師の断言には、どれほど聖書的根拠があるのでしょうか?伝道者の書の「だれが知っているだろうか。人の子らの霊は上に上り、獣の霊は地の下に降りて行くのを。」(3:21)ということばは、根拠とするにはあいまいです。

中世のキリスト教神学にはギリシャ思想における精神と物質の二元論が影響をおよぼしました。精神は尊く価値があるものだが、物質(肉体)は卑しく価値の低いものであるという価値観です。そういう価値観から、救いといえば人間のたましいの救いを意味するものという考え方が広がりました。そうした影響が、C. W. ニコル少年を失望させた牧師の断言の背景にあるように思います。

2 全人的救い

神が人間に息を吹き込まれたということは、他の動物に比べたときの人間の特質であるが、他の被造物が神の救いの対象でないといえるのでしょうか。それは、救済ということをあまりにも狭く見た捉え方です。たましいのみが救いの対象と考えるのは、霊肉二元論の

思想であって、聖書を起源とはしていません。

私たちは、「使徒信条」で「我はからだのよみがえり、とこしえのいのちを信ず」と告白します。つまり、私たちは霊だけでなく、からだまるごと救っていただくのです。パウロも言います。「もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。」（ローマ 8:10, 11）イエスを信じた者のうちには御霊が住まれ、肉体と霊の葛藤が始まる。だが復活の日にはからだ全体にも救いが及ぶのです。そのからだは「御霊に属するからだ」（1 コリント 15:44）と呼ばれます。

3 全被造物の救い

さらに、聖書のいう救済とは人間だけの救いを意味してはおらず、全被造物の救いを意味しています。そもそも被造物のかしらである人間が神に背いたために、被造物は虚無に服して「いばらとあざみを生えさせ」（創世記 3:18）るようになりました。そして、今被造物は「切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入られます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。」（ローマ 8:19-22）主イエスが再臨し、「正義が住む新しい天と新しい地」をもたらされるとき、全被造物の救いが完成することになります（2 ペテロ 3:13）。

滅びは人間の神への反逆から始まり、神に背を向けたときにアダムは、自分のからだに働く情欲を意志でコントロールできなくなり、妻との関係もこわれました。さらに、大地も人間と不和になってアダムは苦しんで食物を得るようになりました。こうした滅びからの救いなので、まず対神関係の正常化に始まり、次に対自分関係の正常化、対隣人関係の正常化、そして被造物との関係の正常化にまで及んでいくのです。そのビジョンをイザヤは次のように述べています。

「狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。」（イザヤ書 11:6-8）

4 人と動物の「会話」・・・ちょっと推論しすぎかも

ところで、創世記 3 章にひとつ気になることがあります。あなたが動物園でライオンを眺めていると、そのライオンがあなたに向かって「なにをじろじろ見ている。こんな牢

屋に私を閉じ込めて何がおもしろい。」と言ったら、びっくりして髪の毛が逆立つだろう。それなのに、エデンの園で蛇に語りかけられたとき、女は「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。」（創世3:2）と平然と答えています。不思議です。

なぜ女は蛇に話しかけられて驚かなかったのでしょうか。それは彼女が日常的に動物たちと会話をしていたからであると考えざるを得ないでしょう。もちろん人と動物との「会話」は、人間同士の会話とは方法や理解度が異なつたでしょうが、墮落以前は、人間と他の被造物との間に、もっと豊かなコミュニケーションがあったと推定されます。だとすれば、主がもたらされる新天新地では、私たちは他の被造物とも親しい交わりを経験できることでしょう。あのイザヤの預言のように。

では、最初の問いにもどって「いい犬は天国に行けるのか？」ということです。欲張りのアカンが聖別のものを盗んで罪を犯したとき家族も家畜も滅ぼされました。それはアカンをかしらとする契約に家畜も入っていたからでしょう。また、ノアの大洪水のとき、神がお選びになったノアをかしらとする契約の中にある動物たちは救われました。とすると、神がお選びになった動物たちは救われて、新しい地に住むことになるでしょう。少なくともクリスチャンを飼い主とするペットは新天新地に入れられる得ると推測するのは筋が通っています。

XVI 原福音とアダムの信仰告白

1 アダムの子孫

なにか罪を犯してしまったとき、「アダムがあんなふうには善悪の知識の木の実から取って食べなければ、私たち人類は悲惨なことにならなかつたのに。」こんなふうにつぶやいたことのある読者がいるのではないのでしょうか。しかし、こんな言い訳をするとき、私たちは自分自身があの墮落した夫婦の子孫であることを証明しています。なぜならば、アダムは罪を犯して神から問い詰められたとき、こう言ったからです。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」また女は言いました。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。」あのとき、へびはほくそえんだことでしょう。自分の罪を認めず、その責任を他に転嫁する行為が、「私は墮落したアダムと女の子孫です。」と証明しているのです（マタイ 23:29-31 を参照）。

始祖アダムは罪を犯しました。アダムは自然首長あるいは契約的に人類の代表ですから、全人類は神様の前に有罪となりました。また、その罪の性質が、事実として人類全体にひろがって、わたしたち自身の中にも巣食っています。

2 死の中にいのちを

さて、最初の夫婦が罪を犯したのち、神から裁きのことばが、蛇・女・男の順にかけられました。ところが、その後、アダムは「妻の名をエバと呼んだ。それは、彼女がすべて

生きているものの母であったからである。」（創世記 3:20）とあります。うつむいていた女は「えっ」と顔を上げて意外なことばにアダムの顔を見つめたでしょう。なんと意外なことばではありませんか。これまでのアダムの過ちと、神から有罪宣告の顛末を振り返って見てみれば、女に誘惑されてアダムは罪を犯し、大地は呪われ、アダムには死の宣告がなされたのです。

「土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならぬ。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」（創世記 3:18-21）

アダムの妻の名は、「すべて死すべきものの母」とでも呼んだほうが相応しかったのではないのでしょうか。けれども、驚くべきことにアダムは妻のことをエバ「すべていのちあるものの母」と呼んだのでした。どうして、アダムは妻のことを「すべていのちある者の母」と名づけることができたのでしょうか。不思議です。前の文脈をたどるとき、その理由はただひとつしか見当たりません。それは、神がへびに向かって語られた、「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」（創世記 3:15）ということばです。死をもたらしたへびのあたまを打ち砕くいのちの君の到来が告げられているこの一節です。

アダムは蛇に向かって語られる神の呪いのことばのうちに、いのちの君である「女の子孫」が蛇のすえを踏み砕いて勝利をもたらし、いのちをもたらす日が来るのだという約束を聞き取って、その約束を信じて、妻をエバ「すべていのちあるものの母」と名づけることができたのでしょう。

こうして見ると、確かにアダムにあって人類に罪と死が入ってきたのですが、また同時に、アダムにあって、来るべきメシヤの到来を信じる信仰というものも始まったと理解することができます。信仰によって、アダムは死の中に生命を見出しました。また、夫からエバと名づけられた女は、この時どれほど慰めを得たことでしょうか。神の約束をかたく握る信仰は闇の中に光を、絶望の中に希望を見出すことができるのです。

3 女の子孫

女の子孫から蛇に対する勝利者が出現するという型は、救いの歴史のなかで繰り返し現れます。イスラエルの歴史の節目には、敬虔な母たちの出産があります。アブラハムの妻サラは不妊の女でしたが、神に与えられた約束を夫とともに信じて、ひとり子イサクを得ました。アブラハムが得たイサクは、ひとり子イエスの型であり、モリヤの山の出来事はゴルゴタの丘の出来事の型です。

「11:17 信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。 11:18 神はアブラハム

に対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、11:19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。」（ヘブル 11:17-19）

アブラハムの子孫はヤコブの時代にエジプトに赴き、そこで奴隷とされます。奴隷の地からの解放は、一人の男の子モーセの出産物語から始まります。こうして、イスラエルの歴史の新しいページが開かれました（出エジプト 1 章）。ここでも「女の子孫」による奴隷状態からの解放が型として記されています。

カナンの地に入って、イスラエルはしばらくの暗黒時代を歩むこととなりますが、その時代に神のことばの光をもたらし、王国時代を来たさせたのは預言者サムエルでした。そのサムエル記もまた、一人の神を畏れる母ハンナの出産物語によって始まっているのです（1サムエル 1 章）。

そして、イエス・キリストの登場にあたって、マタイ、ルカ両福音書の記者は、それぞれの特徴ある筆致で、処女マリヤの出産の出来事を記しています。イエスこそは、まさしくアダムが死の中にいのちを見出して待望した、蛇の頭を踏み砕く「女の子孫」にほかなりません。

さらにパウロはこのキリストに連なる私たちキリスト者が、サタンを踏み砕くのだと語ります。「平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。」（ローマ 16:20）

XVII ケルビムを取り除く方

1 ケルビム

アダムとエバが神に反逆したので、ふたりはエデンの園から追放されることになりました。そして、だれも「いのちの木」に近づくことができないように、園の東側にケルビムが配置されたのです。「こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。」（創世記 3:24）ケルビム（複数）とは御座を守る天使です。ケルビムは、いのちの木にふさわしくない者が近づいて、その実を食べて「永遠に生きることがないように」と、炎の剣で園を守ったのです。

いのちの木は神との交わりを象徴しているものです。神に反逆した人間は、神との交わりこそいのちであるのに、罪があるので神に近づけないというディレンマの中に置かれています。これは教会における戒規に似ています。聖餐の定めのことばの中に次のようがあります。「したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すこととなります。ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくこととなります。そのために、あなたがたの

中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。」（1 コリント 11:27-29）

神の前に罪を認めて告白し、イエス・キリストの十字架の贖いに信頼して御前に立ち返ることが必要なことです。それを抜きにして、主との交わりに入ろうとすることは危険なことなので、ケルブたちは「いのちの木」への道を守っていました。

2 至聖所の垂れ幕のケルビム

時代はくだってモーセの時代、主はモーセに対してアブラハム契約に基づいてシナイ山で契約をお与えになります。その趣旨は、主が恵みによってイスラエルをエジプトから救い出し、ご自分の民として、約束の地を相続させてくださるということでした（出エジプト 6:6-8）。内容はアブラハムに対する約束と重なりますが、モーセに与えられたシナイ契約の特徴は、＜主が救い出した民の中に住まわれる＞という点です。

律法とは聖なる神とともに生活するためのルールでした。そして、神は、ご自分がイスラエルの民の中に住まわれることのシンボルとして、幕屋を作るようにモーセに命じました。ですから、出エジプト記の内容は、＜エジプト脱出・律法・幕屋建設＞という三つのことから成っています。

出エジプト記末尾の結論的部分には、主が竣工した幕屋に住み始められたことを示す栄光が満ちました。「また、幕屋と祭壇の回りに庭を設け、庭の門に垂れ幕を掛けた。こうして、モーセはその仕事を終えた。そのとき、雲は会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。」（出エジプト 40:33-35）

さて、幕屋の中心には聖所があり、聖所の中は分厚い幕で仕切られました。神は、その分厚い幕の奥の至聖所に臨在を現わされました。至聖所に入ることが許されたのは、大贖罪の日で大祭司だけであり、その大祭司でさえ勝手な時に入るならば、主の聖なる臨在に打たれて死んでしまいます（レビ 16:2、ヘブル 9:7）。

聖所と至聖所を隔てる分厚い垂れ幕は、「青色、紫色、緋色の撚り糸、撚り糸で織った亜麻布で垂れ幕を作る。これに巧みな細工でケルビムを織り出さなければ」なりません（出エジプト 26:31）。垂れ幕の向こう向こうは主の臨在が著しく現れるところで、エデンの園を意味しています。エデンこそアダムが経験していた神との交わりの中場なのですが、罪がきよめられていない者は聖なる主に近づけません。垂れ幕に織り出されたケルビムは、エデンの園の東に配置されたケルビムを表現しているわけです。この聖所と至聖所を隔てるケルビムの幕は、その後、ソロモン以後の神殿にも引き継がれていきます。

3 ケルビムの垂れ幕は廃棄された

ところが、主イエスが十字架にかかっているいのちを捨てられたとき、聖所と至聖所を仕切る垂れ幕が上から下に真っ二つに引き裂かれました。「そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた。すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。

そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。」(マタイ 27:50, 51)ケルビムの幕を上から下に真っ二つに引き裂いたのは、神ご自身でした。神は、もはやケルビムの幕は無用であるとして、廃棄されたというわけです。それは神がその臨在を現わされる至聖所への道が、イエス・キリストの死によって開かれたからです。

しかし、それは罪がきよめられていようといまいと、誰でも無条件で聖なる神の懷に飛び込むことができるようになったという安易な意味ではありません。旧約時代、神は罪に関してうるさいことをいう怖い親父だったけれど、新約時代になってからは、心を入れ替えてもう厳しいことを言わないで包み込んでくれる母性的神に変貌したということではないのです。真の神は旧約時代であれ新約時代であれ「ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることもできない方です。」(1テモテ 6:17)

この光の中に住まれる近づきたい聖なる神に私たちが大胆に近づくことができるようになったのは、ひとえにイエス・キリストの贖罪のみわざのゆえです。神の御子が、人となって来られて、ご自分の肉体を十字架上でゲヘナの呪いを受けてくださったので、その犠牲のゆえに、私たちは罪赦されきよめられた者とされたのです。キリストを抜きにして、私たちは聖なる神に近づくことは不可能です。ただイエス・キリストの受肉と十字架による贖いを根拠としてのみ、私たちは父なる神のみもとに行くことができます。「イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。」(ヘブル 10:20)「神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。」(1テモテ 2:5)

XVIII 俺流の礼拝はだめ

「ある時期になって、カインは、地の作物から主へのささげ物を持って来たが、アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。主はアベルとそのささげ物とに目を留められた。」(創世記 4:3, 4 新改訳第三版)

1. 三つの解釈

カインとアベルの献げ物の記事を読んで、なぜ神はアベルの献げ物には目を留めて、カインの献げ物には目を留められなかったのでしょうか。

三つの解釈があります。第一の解釈は、神がどの人間のささげものを受け入れるかどうかは、神の主権に属することであって、人間は云々できないのだという説です。確かにそれは神の主権に属することですが、捧げものに関する基準について秘密にしているわけではなく、後に与えられるレビ記などでは神は人間に丁寧に教えてくださっています。

創世記 4 章 7 節で、神はカインに対して「あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなた

を恋い慕っている。」とおっしゃっています。ここから推論すれば、カインは神にささげる正しい捧げ物とは何かを知っていながら、あえて正しく行わなかったから受け入れないのだと言われているようです。

第二の解釈は、捧げ物は動物犠牲でも地の産物でもよかったが態度が違ったという解釈です。「チェーン式新改訳聖書」の脚注には、「主がアベルのささげ物に目を留められたのは、ささげ物に対する彼の態度である」とあります。新改訳聖書第一版から第三版までは翻訳は、ことさらにアベルの態度が良かったという印象を与えるものになっているのは、この解釈を背景としているのでしょう。「4:3 ある時期になって、カインは、地の作物から【主】へのささげ物を持って来たが、4:4 アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。【主】はアベルとそのささげ物とに目を留められた。」（第三版）4節は口語訳聖書、文語訳聖書では単に「肥えたもの」とあるだけで、「最上のもの」とはなくて、単に「肥えたもの」とあるだけです。新改訳2017では「肥えたもの」と普通の訳に改められています。

第三の解釈は、アベルは動物犠牲をささげたが、カインは大地の産物をささげたからだという理解です。その根拠は为什么呢？

第一に創世記第4章に書かれていることで、両者の礼拝の単純明白な違いは、羊か地の産物かという点だけです。「カインは農夫だから農産物をささげるほかなかったじゃないか？」という人がいるかもしれませんが。そんなことはありません。もしカインは羊をささげるべきだと知ったなら、アベルに頼んで「肥えた羊を、農作物と交換して譲ってくれ。」と言えばよかっただけのことです。あえてそうしなかったところに、カインの問題を感じます。

カインとアベルは、動物の犠牲の血が流されて自分たちの罪が覆われたという経験をした父母から、「罪が赦されるためには血が流されなければならない」という、聖書的礼拝の根本原則を幼いころから教えられていたはずですが、しかし、カインはあえて、神の求めに背いて、俺流のささげ物を神の前に持ってきたということでしょう。「俺が畑で汗水たらして作った作物なのだから、神が受け入れてくれないはずはない。」という勝手な思いやプライドがカインにはあったのだと思います。

3. 礼拝の根本原理 「血を注ぎだすことがなければ」

本日の箇所は、礼拝の根本原理、聖書的宗教の本質を教えています。神は、アダム以来罪に落ちてしまった私たちの礼拝に関して、「血を注ぎだすことがなければ、罪の赦しはない」（ヘブル9:22）という根本原理をお定めになっています。旧約聖書レビ記における祭儀のなかには、全焼のいけにえ、罪のためのささげ物、和解のいけにえなどとともに、穀物のささげものというものも含まれていますが、穀物のささげものは単体でささげられるものではなく、血を流す生贄といっしょにささげられるものだったようです。

旧約時代には牛や羊の動物犠牲が繰り返しささげられましたが、それらはキリストの十字架の犠牲という本体を指差す影でした。キリストの十字架の死による贖罪を抜きにして、

私たちの礼拝は成り立ちません。キリストを抜きにして、私たちは父なる神に近づくことはできないのです。キリスト教は「みんながキリストの愛に満ちた生き方をまねして生きて行けば世界は平和になる」という道徳ではありません。キリスト教信仰とは、私たちが神と和解するためには、キリストの十字架の死と復活が必須であったと主張する代償的贖罪の信仰なのです。新約の教会では、聖餐式がそれを明瞭に表しています。

カインは俺流の奉献物を神に押し付けようとしてしました。礼拝は、人間が心をこめてさえいれば、自分流でささげればよいというものではなく、礼拝を受けてくださる神様がお定めになった原則にしたがってささげなければなりません。礼拝に心をこめることは大事なことです。冷たい形ばかりの礼拝は神に喜ばれません。しかし、その心をこめるべきポイントは、自分たちの気分が高揚するとかいうふうなことでなく、神のみことばにかなうことにかんしてなのです。大祭司アロンの息子ナダブとアビフは異なる火を神の前にささげて、神の火に焼かれてしまいました（レビ10章）。また、サウル王は預言者サムエルがささげるべき神へのささげものを、王である彼がささげて神の怒りをこうむりました（1サムエル13章）。

神は、私たちの日常の行動については、私たちの自由裁量に相当まかせています。けれども、こと礼拝については、神は人間が偶像を工夫したりして、さまざまな自己流あるいは異教的な工夫を付け加えることを禁じています。

「あなたがたは、私あなたがたに命じるすべてのことを、守り行わなければならない。これに付け加えてはならない。減らしてはならない。」（申命記12:32）というのが礼拝の原則です。

XIX 原罪と都市文明

1 原罪

エバはみごもって男の子を得たとき、喜びをもって「私は、主によってひとりの男子を得た」と言った。」とあります(創世記4:1)おそらく、エバは神が約束されたように「女の子孫」が蛇の頭を踏み砕くとおっしゃった約束がこの男の子によって成就されるのだと期待したからです(創世記3:15)。けれども、日に日に育っていくわが子を見ているうちに、夫アダムも妻エバも暗然たる思いにとらわれます。子どもは幼くても、自分たちの罪を引き継いで生まれてきていることが、明らかになってきたからです。特に弟アベルが生まれると、幼い子どもたちの間にも毎日のように争いが起こるようになりました。原罪です。

「ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。」(詩篇51:5)。「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。」(ローマ5:12)とあるとおりです。

カインは人類の歴史上初の人殺し、しかも兄弟殺しをしてしまいます。アダムにおいて

入ってきた原罪は、事実として全人類に遺伝してきたのです。

2 カインと文明

弟を殺害したカインに対して、神は次のように仰せになりました。「あなたは、いったいなんということをしたのか。聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。今や、あなたはその土地にのろわれている。その土地は口を開いてあなたの手から、あなたの弟の血を受けた。それで、あなたがその土地を耕しても、土地はもはや、あなたのためにその力を生じない。あなたは地上をさまよひ歩くさすらい人となるのだ。」（創世記 4:10-12）カインが土地にのろわれました。カインは、主に尋問されても悔い改めず、去ってしまいます。そして彼が住み着いたのは、エデンの東ノデ。ノデというのは「さすらい」という意味です。住み着いても、心はさまよっているのです。

神に背いて去ったのはカインだけでなかったようで、アダムの娘たちのうちからカインの妻となる者が出て、やがてカインは町を建てました。都市文明の始まりです。ジャック・エリュールは著書『都市の意味』のなかで「都市の歴史がカインによって始まるということは、数多ある些末事のひとつとみなすべきではないのだ。」と指摘しています。文化形成は神の命令ですが、墮落後の人類の歩みを見るときに、都市が、カインの刻印を帯びているということに気がきます。その一つは土との疎遠な関係です。都市の形成は土地にのろわれた人類の土に対する復讐のようです。都市は石畳やコンクリートで地面を覆って、都会人は土から疎遠にすごし、「泥臭い」ことを軽蔑します。

他方、神はアベルを失ったアダムとエバにセツという息子を与えます。セツとその子孫は祈りをもって神に仕える一族となりました。「4:25 アダムは、さらに、その妻を知った。彼女は男の子を産み、その子をセツと名づけて言った。『カインがアベルを殺したので、彼の代わりに、神は私にもうひとりの子を授けられたから。』 4:26 セツにもまた男の子が生まれた。彼は、その子をエノシュと名づけた。そのとき、人々は【主】の御名によって祈ることを始めた。」（創世記 4:25, 26）エノシュという名は「弱い」ということを意味していました。弱さのなかで、この一族が主を名を呼び始めののです。貧しい者、悲しむ者は幸いだという山上の祝福を思い出します。

ところで、もろもろの華々しい文明はセツ系の民のうちにはではなく、カインの子孫に生み出されていきます。「4:20 アダはヤバルを産んだ。ヤバルは天幕に住む者、家畜を飼う者の先祖となった。 4:21 その弟の名はユバルであった。彼は立琴と笛を巧みに奏するすべての者の先祖となった。 4:22 ツィラもまた、トバル・カインを産んだ。彼は青銅と鉄のあらゆる用具の鍛冶屋であった。トバル・カインの妹は、ナアマであった。」（創世記 4:20-24）。家に住む者、牧畜、音楽、鉱業・冶金業を始めたのはカインの子孫でした。聖書は文明を全否定しているわけではありません。しかし、都市と文明がカインの一族から生まれたということから、学ぶべきことがあります。

それは4章16節に見るように「カインは神の前から去って」とあるように、神なしで

生きて行くぞという人間の思いが文明が生まれてきたということです。神が守りを信じられないので、家の周りに垣根や城壁を築き、敵を攻撃するために武器を生み出したのです。都市と文明はカイン族にとって神にとって代わるものでした。

そして、神に反逆したカイン族の力こそ神なりとする思想は、最初の一夫多妻主義者レメクのことばによく表現されています。レメクはその妻たちに言いました。「アダとツィラよ。私の声を聞け。レメクの妻たちよ。私の言うことに耳を傾けよ。私の受けた傷のためには、ひとりの人を、私の受けた打ち傷のためには、ひとりの若者を殺した。カインに七倍の復讐があれば、レメクには七十七倍。」（創世記 3:23, 24）

しかし、力を神とする文明によって本当に人間は自律し、自由になれるのでしょうか。いいえ。私たちは現代人が文明の奴隷になっているという事実を見るのです。金銭の奴隷、核兵器の奴隷、物質主義の奴隷です。「それゆえ、神は、彼らとその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。それは、彼らが神の真理を偽りと取り替え、造り主の代わりに造られた者を拝み、これに仕えたからです。」（ローマ 1：24，25）

神に背を向けて文明を築くとき、人は自分の目的が神を愛することと、隣人を愛することであることを見失い、文明を崇拝する奴隷となります。本来、文化的営みの一切は、神を愛すること、隣人を愛することという目的に奉仕するための手段にすぎません。ところが化学至上主義、芸術至上主義、経済至上主義などはみな思想的偶像崇拝です。

真の自由は、被造物ではなく、創造主なる神をあがめるところにこそあります。人間の真の自律は神に背くところではなく、神に仕えるところにあります。文明は目的でなく手段であることを常にわきまえて、目的は真の神を愛し、隣人を愛することであることを忘れないようにしたいものです。

XX 系図の読み方（創世記 5 章）

系図のメッセージの読み取り方は、三点あります。第一は全体の構造に着目することです。第二は「大切なことは繰り返される」という原則です。第三は例外に着目することです。創世記五章の系図は私たちに何を告げているのでしょうか。

1 アダム→セツ→ノアという構造

この洪水前の世代を数えてみると、アダムからノアまで十代です。他方、十一章の洪水後のセムからアブラムまでの系図を数えると、こちらも十世代です。古代の系図記述法にならって七代とか十代で整理をして書く記述法がとられているのでしょうか。マタイ福音書のイエスの系図では、十四代・十四代・十四代と整理されています。

ただ創世記五章の場合は「Aは何年生きて、Bを生み、そして何年生きた。」という書き方で、人名が省かれたとは考えにくい気がしますが、「Aは何年生きて、Bの先祖にあたる

者を生み、何年生きた。」という意味で「Aは何年生きて、Bを生み、そして何年生きた。」と記述されることもあります。ですから寿命を足して地球の古さを計算するのは無駄です。

さて、創世記五章の系図が告げようとしていることの第一は、その始まりと終わりを見て見れば、あきらかにノアの来歴です。アダムからノアにつながっていく人名だけが記されています。敬虔なセツの子孫にノアが出現したのです。

2 罪と死・・・繰り返される表現

さて、創世記五章の系図を読んで不思議に思うのは、寿命がたいへん長いことです。平均寿命はおおよそ九百年。これは個人の寿命ではなく部族とか王朝の長さではないかという説もありますが、「何百何十何年」という厳密さからみて無理で、これはやはり個人の寿命です。大洪水の前は有害な宇宙線が地上に降り注いでいなかったのも、寿命が長かったのだという人々もいますが、よくはわかりません。大洪水直前に神が「人の齢は、百二十年にしよう」（6:3）とおっしゃったので、大洪水後、人の寿命は今日程度に短くなっていきました（11章）。

神が「人の齢は、百二十年にしよう」と決断された背景には、「地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾く」（6:5）ということがありました。原罪を抱えた人がいたずらに長生きすると、罪を犯すことに慣れてしまうのでしょうか。

また、この系図を音読してみると、「こうして彼は死んだ」という表現が繰り返されていることに気づきます。彼らはことごとく死にました。「しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ。」（創世記2:17）とおっしゃった主のことばは、ここに確かに成就しました。アダムだけでなく、アダムから出た子孫すべてに死が入ってきたのです。

3 エノクは神とともに歩んだ…例外を読み取る

さて、この系図のなかに例外があります。それは平均寿命九百歳という記録の中に、ただひとり三百六十五年で世を去った人がいたことです。

「エノクは六十五年生きて、メトシェラを生んだ。エノクはメトシェラを生んで後、三百年、神とともに歩んだ。そして、息子、娘たちを生んだ。エノクの一生は三百六十五年であった。エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。」（創世記5:21-24）

エノクがいなくなったとき、人々はエノクの行方を探したことでしょう。しかし、やがて彼らは、神がエノクを取り上げられたのだという啓示を受けました。エノクは死を見ることのないままに、神のもとに連れ去られたのです。

地上に残された人々はエノクの思い出を語り合います。「エノクの生涯をひとことで表現する何がいいだろう？」すると異口同音に「『エノクは神とともに歩んだ』という一語に尽きるじゃないか。」ということになったのでしょう。このわずか四節の中に、「エノ

クは神とともに歩んだ」というフレーズが二度も出てきます。

ところで今もしあなたが突然世を去って記念会が開かれたなら、人は「彼は（彼女は）何とともに歩んだ」と言うのでしょうか？クリスチャンなら「彼はカネとともに歩んだ」「彼女は欲とともに歩んだ」などというのではなく、「彼は、彼女は神とともに歩んだ」と要約されるような人生を歩むことができれば、と願うことです。

もっとも、エノクは必ずしも最初から「神とともに歩んだ」というわけではなかったようです。彼の人生の転機は六十五歳のとき、息子の誕生の日に訪れました「エノクはメトシェラを生んで後、三百年、神とともに歩んだ。」とあります。息子の誕生に際して、なにがあったのかは分かりませんが、この息子の誕生の日を境に、エノクは神とともに歩むようになったのです。

ある日、エノクさんが野を散歩をしていました。いつものように神とともに語らいながら行く道はなんと楽しいことでしょうか。時がたつのも忘れて語らううち、気がつくともう夕日が西の山の端に近づいています。神がおっしゃいました。「エノク。今日はずいぶん遠くまで歩いてしまった。少し早いが、うちに来ますか。」エノクは「そうですね。そうさせていただきますでしょうか。」こうして、神がエノクを取られたので、彼はいなくなったのでした。

エノクの出来事は、主イエスの再臨のときに、聖徒を天に引き上げられる事の型です。私たちもエノクのように、主とともに歩みたいですね。「主は、号令と、御使いのかしららの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一っしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」（1テサロニケ 4:16, 17）

XX I 大審判前夜 創世記 6 : 1 - 12

「人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようなからです。洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。」（マタイ 24 : 37-39）主イエスは、このように、ノアの大洪水をご自分の再臨と最後の審判の型であると語られました。ですから、最初に造られた世界に対する神の大洪水によるさばきを学ぶならば、私たちの主の再臨へのよい備えとなるでしょう。

1 めとったり、とついだり

神に背き、己が力で築いた都市文明を誇りとしてきたのがカイン族でした（創世記

4:16-24)。他方、死んだアベルの代わりに神がアダムとエバに与えた息子セツから出た一族は、己の無力のなかで主の御名を呼ぶ祈りの民として歩みました（創世記 4:25, 26）。世界的に言えば、羽振りがよかったのはカイン族で、セツ族はいかにも地味です。けれども、セツ族こそ、神を知る幸いな一族でした。両部族は、もともと異なる価値観のもとに生きていました。

しかし、時を経るにつれて、カイン族とセツ族は近づき入り混じってしまいます。いや混じるというよりも、セツ族はカイン族の価値観に呑みこまれてしまい、ついには神を畏れる人はただノアだけになってしまうのです。それは男女交際と結婚のあり方に典型的に現れてきました。

「さて、人が地上にふえ始め、彼らに娘たちが生まれたとき、神の子らは、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした。」（創世記 6:1, 2）

ここにある「神の子ら」を天使と解釈する人もいますが、御国における人間は「めとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです。」（マルコ 12:25）と主イエスからはっきりと言われましたから、天使の結婚はありえません。考古学関連からの異説もありますが、私たちとしては、ここは創世記 4 章、5 章からの流れのつながりから、「神の子ら」と呼ばれているのは、セツ族の男たちを意味しており、「人の娘ら」はカイン族の娘たちを意味していると理解するのが適切ではないかと思えます。

セツ族の青年たちは「神の子ら」と呼ばれるのですから、一族の伝統から言うならば、結婚に関しても、なにより神のみこころを求めて祈り、相手を選ぶべきでした。ところがノアの時代には彼らは神の御心などそっちのけで、カイン族の娘たちがいかにも美しいのを見て、好きな者を選んで結婚するようになってしまったのです。敬虔なセツ族の娘たちの清楚な美しさには目を留めず、着飾ったカイン族の娘たちの淫靡な魅力にひかれてしまうようになったというわけです。性の乱れ、そして結婚の乱れということが、大審判前夜の社会の風潮でした。性の乱れは結婚と家庭を破壊します。破壊された夫婦は、そこに育てられる子どもたちの心を壊し、ついには社会全体を腐敗させます。こうして終末の様相はいよいよ深くなっていきました。

聖書は結婚・夫婦・家庭を重んじます。だからこそ、サタンは最初からアダムとエバという夫婦に攻撃の矢を射掛けて来ました。墮落したノアの時代にも、やはり神のみこころを無視して「めとったり、とついだり」していました。現代もまさに同じ状況です。キリスト者にとって結婚で肝心なことは、「好きな者を選ぶ」ことでなく神のみこころです。

2 ネフィリムたち

神のみこころに無関心な名ばかり「神の子」であるセツ族の男たちと、神に反逆するカイン族の女たちが結ばれた家庭には、どのような子が育つのでしょうか。

「当時もその後も、地上にはネフィリムがいた。これは、神の子らが人の娘たちのところ

に入って産ませた者であり、大昔の名高い英雄たちであった。」（新共同訳、創世記 6:4）ネフィリムというのは巨人族とされるので肉体的にも巨大であったかもしれませんが、それと同時に、その心が傲慢によって巨大に膨れ上がっていた人々であったと解するのが適当だろうと思います。レメクに連なるネフィリムたちは、神、真理、正義といったことにはまるで無関心で、この世で権力と富と快樂とを得ることが人生の成功であるという種類の人々です。そういうネフィリムたちをこの世は英雄とほめそやす時代でした。神は、そのような世のありさまをご覧になりました。「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」（創世記 6:5）

3 ノアは神とともに

こうして、主は「地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛め」ついに決断されたのです。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やはうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ。」と。

「愛の反対はさばきである。ところで神は愛である。したがって、神はさばくことは決してなさない。」こんなことを教える人々がいます。そして、さらに彼らは「最後の審判や地獄などは、教会が信者を脅して支配するために勝手に作り出した作り話である。」と続けます。たしかに、神は忍耐強いお方です。けれども、神は正義のお方ですから、あくまでも悔い改めようとしないこの世を最終的にはお裁きになる日が必ずやってくると聖書は告げています。

霊的・道徳的に暗黒の世界でした。「しかし、ノアは、主の心にながっていた。・・・ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。」（創世記 6:8,9）とあります。罪の世にあって罪に染まらない秘訣は、常に神とともに歩むことをおいてほかにありません。

XXII 大洪水 創世記 6 章～9 章

1 大洪水の期間と規模

大洪水とノアの航海の期間は、ノアの生涯の 600 年目 2 月 17 日に始まり、601 年目の 2 月 27 日ですから（8:14）、1 年と 10 日間です。ただし当時の暦が一年 365 日であったか、360 日であったか、はたまた別の日数であったかは不明です。

降雨は 40 日間続きましたが、増水は 150 日間続きます（8:24）。それは、ノアの舟が浮かんでいるあたりでは雨が止んだけれども、他の地域ではなお雨が降りつづけており、また、「大いなる水の源」（7:11）という地下水源から水が噴出していたからでしょう。

大洪水の規模については、これをユーフラテス盆地を覆ったとする地域限定説と、地球

全体を覆ったのだとする地球規模説があります。ハーレーが『聖書ハンドブック』（いのちのことば社）でも紹介している地域限定説は、「天の下にあるどの高い山々も、すべておおわれてしまった。」（19）という記述は、当時の人々の世界観のなかでの「天の下」か、あるいは記述者の視点からの表現であるとしています。たしかに、ルカ伝でも「全世界の住民登録をせよ」という勅令が皇帝アウグストから出た」とありますが、その「全世界」はローマ帝国全土を意味するにすぎませんから、同じように創世記で「天の下」というのが当時の世界観における世界を意味すると解釈することも無理ではありません。実際にノアの視点から見えたのはせいぜい箱舟の周囲百キロ程度にすぎなかったでしょうから、地球上のすべての山々がおおわれたのを実際に見ることができたはずもありません。また、神の裁きの目的は全人類を滅ぼすことにあったので、当時、人々が住んでいた全地域を洪水が覆い尽くせば、こと足りたのは事実です。

しかし、地域限定説の弱点は、箱舟が漂着したアララテ山は海拔 5100 メートルもあることです。ユーフラテス盆地の大洪水では、たとえ大洪水にともなう地殻変動が起こる前のアララテ山が海拔 300 メートルの小山であったとしても頂上まで水が届きません。地域限定説の場合、アララテ山は別のごく低い丘を指していると言わねばならなくなります。

他方、地球規模説の場合、「どの高い山々も、すべておおわれてしまった。」ということばは、神の視点からのことばです。地球規模の大洪水があったならば、当然その痕跡が全世界に残っているはずですが、地球規模説に立つ H. モリスたちは、地表の多くの部分を覆うカンブリア紀から新生代に至る地層がその痕跡であると主張します。

地球規模説に対して向けられる疑問の一つは、「アララテ山までもおおったという水はいったいどこから来て、どこへ行ったのか。たとえ南極と北極の氷がすべて溶けても、海面は数メートル上昇するだけではないか。」ということです。これに対して地球規模説論者は、あの大量の水は創世記 1 章 7 節の「大空の上にある水」および、「巨大な大いなる水の源」（同 7:11）という大洪水前の地下水から来たのだという仮説を提示しています。では、ひとたび地表前面をおおった水はどこに行ったのかというと、洪水前には地表は全体として平坦で深い海もなかったから水は全地表を覆うことができた。だが大洪水には大地殻変動が伴い、山々が高くなり、海は深くなったので、かつて全地表を覆った水は深くなった海に集ったのだと説明しています。そして、聖書のことばとしては、次の詩篇のことばを引用します。

「104:5 また地をその基の上に据えられました。

地はそれゆえ、とこしえにゆるぎません。

104:6 あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。

水は、山々の上にとどまっていた。

104:7 水は、あなたに叱られて逃げ、

あなたの雷の声で急ぎ去りました。

104:8 山は上がり、谷は沈みました。

あなたが定めたその場所へと。

104:9 あなたは境を定め、

水がそれを越えないようにされました。

水が再び地をおおうことのないようにされました。」（詩篇104:5-9）

創世記の記述を素直に読めばノアの大洪水は地球規模であったとするほうが、すんなり読めるように思います。

2 神の主権とノアの応答

次に、ノアの大洪水の記事の特徴は、洪水が徹頭徹尾、神の主権によって進められたということと、ノアはこの神の主権に服従したということが強調されていることです。「神が地をご覧になると、実に、それは、墮落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。そこで、神はノアに仰せられた。云々」(6:12、13)このように、ことは神のことばから始まります。流体力学上、復元力最大といわれる箱舟の設計図を示され、その建造と、中に入る人間と生物と食糧について、神がお命じになると、「ノアはすべて神が命じられたとおりにした。」(6:21)とあります。

準備が完了し、七日で洪水が来るから箱舟に入ることを命じられると、「ノアは、すべて主が命じられたとおりにし」ました(7:5)。ノアの神のことばへの服従は、さらに16節でもう一度念を押されます。「入ったものは、すべての肉なるものの雄と雌であって、神がノアに命じられたとおりであった。」そして、選ばれた生き物たちが入った後、箱舟の戸を閉じたのは、主でした。「それから、主は、彼のうしろの戸を閉ざされた。」(7:16)この出来事は最後の審判を思わせます。箱舟の戸は主がお閉めになります。最後の審判においてもそうです。扉の外の人々は、泣いて歯軋りするのです。

さて雨は40日間続き、150日間増水しましたが、水が引き始めるのも主のみわざです。「神は、ノアと、箱舟の中に彼といっしょにいたすべての獣や、すべての家畜とを心に留めておられた。それで、神が地の上に風を吹き過ぎさせると、水は引き始めた。」(8:1)この「風」と訳されることばルアハは「霊」とも訳されることばで、創世記1章2節では霊と訳されています。この箇所は創世記1章と対応しているので、「霊」と訳したほうがベターでしょう。最初の創造のときのように、神の霊が地上に秩序と生命を与えられたのです。

ついに洪水が終わって、ノアが舟から出るのもまた、主のご命令によります。すでに雨は止み、地の面はかなり乾いていたのですが、ノアは決して自分の判断で外に出ようとはしませんでした。ノアは、この裁きは主によって始められた以上、主によって終わるのだと確信していたからです。「そこで、神はノアに告げて仰せられた。『あなたは、あなたの妻と、あなたの息子たちと、息子たちの妻といっしょに箱舟から出なさい。(略)』そこで、ノアは、息子たちや彼の妻や、息子たちの妻といっしょに外に出た。」(8:15-18 抜粋)さすがノア！よくぞ神のことばを待ちました。筆者なら、地が乾いてきたらからだがうず

うずして浮かれて、外に飛び出してしまいそうです。

3 家族と動物たちと

最後に、大洪水の記事のなかで神のまなざしに注目しましょう。「あなたとあなたの全家族とは、箱舟にはいりなさい。」(7:1)ということばです。神はノアのみならず、ノアとその家族とを大洪水のさばきから救い出そうとなさいました。神は、信仰者の家族を大事にしてくださるのです。ソドムからロトを救い出そうとするときにも、神はロトのみならず彼の家族を救出しようとされました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も・・・」というピリピの獄屋に響いた使徒の声を思い出します(使徒16:31)。

神が目を注がれるのは、人間だけではありません。神は動物たちにも目を留められました。神の選んだ動物はノアが集めるまでもなく、自分で箱舟のところにやって来ました(20節)。神がその動物たちを選んだのです。神は人間だけの神ではありません。ほかの被造物もまた神の作品であり、神の愛の対象なのです。今日、人間は傲慢になりすぎているようです。私たちと自然環境とは切っても切ることのできない関係です。クリスチャンは、聖書的観点からエコロジーを重んじるべきでしょう。

「神は、ノアと、箱舟の中に彼といっしょにいたすべての獣や、すべての家畜とを心に留めておられた。」(8:1)

XXIII 再出発 食物と国家 創世記 8:15-9:7

1 保持の約束

大洪水が去って、ついにノアと家族と動物たちが箱舟から出ました。一年と十日ぶりに見渡す世界は、荒涼としています。聖なる裁きが行なわれ、神に敵対する罪深い世界が文字通り一掃されてしまったことを思えば、肅然とした思いにされたノアと家族でした。

しかし、新世界にはすでに生命が息吹き始めており、あちこちに緑が見えます。鳩がオリーブの若葉を運んできたのですから。ノアは、自分たちを滅びから救ってくださった神の恵みに感謝し、かつ、これからの自分たちの歩みを神にすべておゆだねする献身の思いをもって、祭壇にいけにえをささげます。それは、神にわが一切をささげますという意味をこめて、すべてを煙にして、天に立ち上らせてしまう全焼のいけにえでした。

主はそのなだめの香りがかがれて、おっしゃいました。「わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことはすまい。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。わたしは、決して再び、わたしがしたように、すべての生き物を打ち滅ぼすことはすまい。地の続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜とは、やむことはない。」(8:21, 22) すなわち、神は今後地球の自転と公転とを確実に維持して、春夏秋冬をただし

く経巡らせ、生き物たちの環境を保持してくださるとお約束くださったのです。そこで、神がノアと結ばれた契約を「保持の契約」と呼ぶことがあります。

2 食物の定めの変更

神はおっしゃいました。「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。」創造のとき、最初の人にお与えになったのと同じことばです。人類の歴史を、さあもう一度ゼロからやり直さないと神はノアにお命じになったのです。

人類が新たな歴史を刻むために、神はここで二つのことをお定めになりました。第一は食物の定めの変更。つまり肉食の許容です。もともと人間と動物たちに許されていた食べ物は、墮落前には穀物菜食でした(創世記 1:29、30)。けれども、おそらく大洪水で自然環境が激変したことが理由で、肉食なしには十分に栄養を補給することが困難な状況になったから、神は肉食を許されました。「生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。」(創世記 9:3)

創造科学の立場の人々は、大洪水以前、地球は「大空の上の水」と呼ばれる(なんらかの様態の)分厚い水の層によって覆われていたために、地表は有害な宇宙線から保護されていたことと、その「上の水」ゆえに地表は酸素分圧が高かったことが生物の生育によい環境だったのではないかという仮説を提供しています。

たしかに、人類の平均寿命ひとつ取ってみても、大洪水前はおよそ 900 年ほどであったと創世記 5 章は告げていますが、大洪水後のセムの系図を見ると、それが見る見る短くなっていったことがわかります(創世記 11:10-32 節)。あるいは、地層の中に残されている体長何十メートルもの巨体を持つ動物たちは、現在の地球環境では到底生き延びることができないでしょう。また、今日では亜熱帯性の海にしか生息できないサンゴの化石が北極で発見されているという報告もあります。こういう報告を見ると、やはり大洪水の前後で地表の自然環境の激変があったこと自体は事実です。ところが、大洪水の後に自然環境の激変が生じました。もはや穀物菜食だけでは、十分に栄養を摂取することがむずかしくなって、神は肉食を許容されたと解釈できるでしょう。

3 剣の権能の制定

人類の歴史形成の再出発にあたって、神は第二に、剣の権能を制定されました。それは、悪を抑制するために公的機関に司法権・警察権をお与えになったということです。「わたしはあなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。わたしはどんな獣にでも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから。」(9:5)

裁判所は武器による強制力を背景として成り立っているのです。「剣の権能」と呼ばれます。ノアの洪水以前、人心が常に悪に傾き世の中の道徳的に腐敗したので、神は世を滅ぼ

してしまわれました。ですが、大洪水後、罪人に満ちている世が墮落し混乱し尽くしてしまわないための措置として、摂理をもってこの世に武器による強制力を備えた司法権を託した国家という機関を設置することにされたのです。

もし国家制度がなければ、この世はどういうことになるでしょうか。性善説に立つ J. J. ルソーは、『人間不平等起源論』で国家制度がないときに人間たちは自由で平等な理想的状態で暮らしていたと夢想しましたが、聖書的観点からいえば、現実はそうではありません。国家なんてできる前に、もうカインはアベルを殺したのです。むしろ核兵器で世界の国々が滅亡したあと出現するのは「北斗の拳」に見るような弱肉強食の世界なのです。実際、太平洋戦争が終わって間もないころ、爆撃で日本の各都市が破壊されて警察力が弱っていたときには、ヤクザが幅を利かせてやりたい放題をしました。

カインの子孫の乱暴者レメクの歌を覚えていますか。彼は二人の妻に対して、自慢げに歌いました。「アダとツィラよ。私の声を聞け。レメクの妻たちよ。私の言うことに耳を傾けよ。私の受けた傷のためには、ひとりの人を、私の受けた打ち傷のためには、ひとりの若者を殺した。カインに七倍の復讐があれば、レメクには七十七倍。」(創世記 4:23, 24)

無法の世界では力ある者は、一つの命を取られたら七十七もの命を奪い取ろうとします。そこで、神が摂理をもって立てる公権力は、一つの命には一つの命、目には目、歯には歯をもって償えと命じる公正の原則をもって裁くために立てられたのです。ですから、司法においては正義が行なわれなければなりません。裁判官がワイロを取るようになったら、その国は早晚滅びます。

XXIV 契約 (その 1)

1 虹一平和の契約のしるし

先日、雨上がりの空に大きな虹を見るたび「神様は平和の契約を結んでくださったんだ。」と感慨を抱くことができるのは、聖書を知る人の特権です。「さらに神は仰せられた。『わたしとあなたがた、およびあなたがたといっしょにいるすべての生き物との間に、わたしが代々永遠にわたって結ぶ契約のしるしは、これである。わたしは雲の中に、わたしの虹を立てる。それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。』」(創世記 9:12, 13) キーワードは「契約」です。神は、アダム、ノア、アブラハム、モーセ、ダビデと契約を結ばれ、これらはすべてキリストにあって成就します。

全被造物を相手に契約を結ばれたと言われていることがノア契約の特徴です。動物たちと 1 年余の旅をした直後のことですから、ノアは「人間と被造物は運命共同体だ」ということを深く認識していたでしょう。環境破壊のはなはだしい現代、特に注目すべきことでしょう。三年前の環境白書によれば、絶滅危惧種は 3155 種に上ります。たとえば南アフリカのケープペンギンの数は、20 世紀初頭の実に 3 パーセント以下にまで激減しています。

この状況は、人間自身も生きることが困難な環境になりつつあることに気付くべきです。

ところで、なぜ虹が平和の契約のしるしなのか。ヘブル語で虹とはケシェトといい、これは弓と同語です。英語で弓のことをボウと言ひ、虹のことをレインボウつまり「雨弓」というのと似ています。戦いが終わって、弓は横にされて壁に架けられるというイメージなのです。空に架かる虹は、神が怒りを収めてくださった平和の契約のしるしです。

ところが、せっかく神が人間に対して平和をくださったのに、人間は欲にまみれた文明でもって運命共同体である被造物を攻撃し続けています。古代メソポタミア文明以来の人類の歴史を見てわかることは、被造物を破壊してきたのは、経済第一主義と戦争です。古代メソポタミアの灌漑農法は大地に塩害をもたらして砂漠化させ、古代中国の万里の長城の建設は豊かな森をゴビ砂漠とし、中世ヨーロッパの森林破壊は農業革命によって大地を破壊し、近世の帝国主義の建艦競争も森を破壊しました。そして産業革命以後の急激な世界経済の成長は世界中に環境破壊をもたらしてきました。「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです」（ローマ 8:19）。今も私たちは、被造物に対する管理責任があります。「みこころの天に成るごとく、地にもなさせたまえ。」と祈っている者として、私たちはその祈りにふさわしい生活をしたいものです。

2 創造の契約

「契約（ベリート）」という語が聖書に登場するのは、ノアの契約が最初ですが、契約自体は、創造の時が最初です。それは、神がアダムに「地を耕し守る」ことを趣旨として被造物の管理を任されたときに結ばれた創造の契約です。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ。」（創世記 2:16, 17）

アダムは、契約のしるしである善悪の知識の木を見るたび、神の主権の前にへりくだり、神を恐れつつ被造物を管理すべきでした。そうすれば神はアダムと被造世界をさらなる栄光のうちに導かれたでしょうが、アダムはこの契約を破りました。それでアダムと人類は死を経験することになりました。以来、人は、最後の敵である死に対して恐怖をいだきながら生きることとなります。そしてアダムの罪は子孫に受け継がれ、人類は罪にまみれて行き、ついにノアの時代に大洪水によって一度は滅ぼされてしまいました。

3 神の契約の主題「わたしはあなたの神となり、あなたはわたしの民となる。」

さて、ノアの大洪水の後、ふたたび増えた人類はバベルの事件で世界に散らされ、諸国ができてきます。10章には「諸国民の表」と呼ばれるセム、ハム、ヤペテから出てくる諸民族の系図があります。この後、神はごく大雑把に言えば紀元前約 2000 年にアブラハム、約 1500 年にモーセ、約 1000 年ダビデにそれぞれ契約を与えました。

主は、アブラハムには「わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。」

もって呼び出してひとつの、神を愛し従う民つまり聖なる公同の教会を形成するという計画を神は持たれました。

神がアブラハムに約束されたのは、彼の子孫が世界中の民族国語を越えた国民の父となり、地を相続するということでした。それでアブラハム契約は<相続の契約>と呼ばれます。「あなたは多くの国民の父となる。」（創世記 17:4）「わたしは、・・・カナン全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。」（創世記 17:8）

アブラハム契約は、当面、子孫イスラエルがエジプトからカナンの地に戻り、この地を相続することによって成就しますが、やがてイスラエルの不従順によって相続地は失われてしまいます。しかし、キリストが来られてアブラハム契約は世界規模で成就します。つまり、キリストを信じる者は民族国籍を問わず、信仰によるアブラハムの子孫となり、世界が相続地となるのです。「そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。『わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした』と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。」（ローマ 4:16）

ペンテコステ以来、全世界に福音が広がり、あらゆる民族国語から神の民が呼び出されて聖なる公同の教会が広がってきたのは、アブラハム契約の成就です。主が再臨される時、この約束の成前はさらに明らかになり完成されます。「柔和な人々は幸いです。その人は地を相続するからです。」

私たちは世界の相続人としての使命があることを自覚することが大事です。私たちは相続人ですから、世界のためにとりなし祈る務めがあります。

2 シナイ契約・・・律法と幕屋の契約（神がともに住んでくださる約束）

神はモーセに<律法と幕屋の契約>を与えました。シナイ契約です。幕屋とは神がその民の中に住んでくださることのシンボルです。では、律法とはなにか。律法とは神とともに生活するための基準です。ところが、イスラエルは律法を破り、紀元前6世紀には滅びてしまいます。その時代、神様は預言者エレミヤを通して、新しい契約についての予告をお与えになりました。

「31:31 見よ。その日が来る。——【主】の御告げ——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。 31:32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。——【主】の御告げ—— 31:33 彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——【主】の御告げ——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。 31:34 そのようにして、人々はもはや、『【主】

を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。——【主】の御告げ——わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」

(エレミヤ 31:31-34)

「11:19 わたしは彼らに一つの心を与える。すなわち、わたしはあなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしは彼らのからだから石の心を取り除き、彼らに肉の心を与える。 11:20 それは、彼らがわたしのおきてに従って歩み、わたしの定めを守り行うためである。こうして、彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。」(エゼキエル 11:19、20)

キリストは「人となって、私たちの間に住まわれた」(ヨハネ 1:14)とありますが、この「住まう」と訳されたことばは「幕屋をはる」と訳されることばです。荒野でモーセが幕屋を完成したとき、栄光の雲が幕屋に満ちて、神の臨在が現れたように、キリストは人となって地上に幕屋を張ってくださいました。

キリストは天の父なる神の右に着座すると、聖霊を注いでくださいました。キリストは、律法を石の板ではなく、聖霊によって人の心の板に刻むことによってシナイ契約を成就してくださいます。「あなたがたが私たちの奉仕によるキリストの手紙であり、墨によってではなく、生ける神の御霊によって書かれ、石の板にではなく、人の心の板に書かれたものであることが明らかだからです。」(2 コリント 3:3) 言い換えると新生ということです。聖霊によって心の板に律法を刻まれると、かつて偶像崇拜を善行だと思っていた人は、創造主のみを礼拝すべきだと願うようになり、今までカネが一番大事だと思っていた人は、神を愛し、隣人を愛することが一番だと悟ります。モーセに約束された契約を、イエス・キリストが受肉し聖霊を注ぐことによって成就されたのです。

3 ダビデ契約

モーセの時代からさらに 500 年ほど下って、およそ紀元前 1000 年、神はダビデ王に契約をお与えになります。ダビデが神殿建設を志したときのことです。

「主はあなたのために一つの家を造る。あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。」(2 サムエル 7:12-14)

約束の内容は、<ダビデの子孫が王国を確立し、その王が神殿を建てるということ>です。主の約束はダビデの子ソロモンが神殿を築いて当面成就されますが、ソロモン死後、王国は南北に分裂して王国は滅びます。アブラハム契約、シナイ契約と同じように、それは当面イスラエル民族という狭い枠のなかで一応成就したかに見えるのですが、結局、人間の罪ゆえに破綻してしまいます。

しかし、このダビデ契約はキリストにあって、真の成就を見ることとなります。ダビデの王座は地上から天上に移されました。すなわち、キリストは死んで三日目によみがえり、昇天して父なる神の右に着座されました。そして、ペンテコステに神の民に聖霊を注いで、神殿としての教会を築かれたのです。聖霊が注がれたペンテコステの日、使徒ペテロはダビデの詩篇を引用しつつ、今日の前に起こった出来事はダビデへの約束の成就であると語ります。

「2:25 ダビデはこの方について、こう言っています。

『私はいつも、自分の目の前に主を見ていた。

主は、私が動かされないように、

私の右におられるからである。

2:26 それゆえ、私の心は楽しみ、

私の舌は大いに喜んだ。

さらに私の肉体も望みの中に安らう。

2:27 あなたは私のたましいをハデスに捨てて置かず、

あなたの聖者が朽ち果てるのを

お許しにならないからである。

2:28 あなたは、私にいのちの道を知らせ、

御顔を示して、私を喜びで満たしてくださいませ。』

2:29 兄弟たち。父祖ダビデについては、私はあなたがたに、確信をもって言うことができます。彼は死んで葬られ、その墓は今日まで私たちのところにあります。 2:30 彼は預言者でしたから、神が彼の子孫のひとりをも彼の王位に着かせると誓って言われたことを知っていたのです。 2:31 それで後のことを予見して、キリストの復活について、『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない』と語ったのです。

2:32 神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。 2:33 ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。」（使徒 2:25-33, エペソ 4:8-16 も参照）。

聖霊が注がれ、あらゆる民族国語を超えた新約の神の家が建てられたのです。「このキリストにあって、あなたがたとともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」（エペソ 2:22）

キリストの王国である教会は、世の終わりまで続き、世の終わりに完成します。主イエスのご在世当時栄えたローマ帝国をはじめ、その後もいくつもの国が栄えては滅びてきましたが、キリストの王国である教会は二千年にわたって世界中に広がってきました。そして、再臨まで永続し完成します。

4 キリストによる契約の最終的成就

以上のように、創造の契約に始まり、ノアの平和の契約によって保たれている世界で、アブラハムの相続の契約、モーセの律法と幕屋の契約、ダビデの王国の契約は、キリストによって成就しました。つまり、キリストが受肉し、十字架と復活によって贖罪をなしとげ、天の御座に着座し、天から聖霊を注いで世界に広がる神の御住まいである教会を建設されることによってすでに原理的には成就したのです。

しかし、主の御国はいまだ完成したわけではありません。完成するのは、主が再び戻られて新しい天と新しい地が造られるときです。完成の日、あの契約の主題が高らかに叫ばれます。

「そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。『見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。』」（黙示録 21:3）

XXVI 権威と服従

ノアとその家族は地を拓いて田畑を作りました。やがて季節が訪れると畑では、多くの作物が実をならせました。それは、「地の続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜とは、やむことはない。」（同 8:22）と約束された主のご真実のゆえです。

1 服従の質が試される

さて、ノアはぶどう畑を作りました。季節になると、畑はたわわな房になり、甘い香りがあたり一面にただよっています。八人家族では、食べ切れるものではありません。そこでノアは、干しぶどうにしたり、搾ってジュースにします。皮袋の中のぶどう汁は何日も置けば自然発酵して、アルコール度数の低いぶどう酒になってしまいます。

主から大洪水の予告を受けて、不敬虔な人々の嘲りの中で箱舟建造を続けた日々、いよいよ大洪水となって箱舟内で動物たちの世話をし続けた極度の緊張と労働の日々、箱舟から出て後、食料を得るために開墾をして日夜働き続けた日々後、さすがのノアも気が緩んだのでしょうか。ぶどう酒に泥酔して、素っ裸で天幕の中で寝入ってしまったのです（同 9:21）

このときでした。カナン之父ハムが、「父の裸を見て、外にいるふたりの兄弟に告げた」とあります（同 9:22）。いつも神を畏れて敬虔で威厳に満ちている父親が、泥酔してあられもない姿をさらしているのを見たとき、末息子ハムは、父親をあなどり、嘲りの対象としたのでした。ハムは、「おい。セム、ヤペテ。おやじが酒を食らってみともない格好して眠っているぜ。神のしもべがいいぎまだ。」とでも言ったのでしょうか。

これを知ったセムとヤペテはどうしたでしょう。彼らはハムといっしょになって父親を嘲るのではなく、むしろ心痛めました。心痛めて、神のしもべである父の恥を覆うために、着物を着せ掛けたのでした（同 9:23）。

神の立てた権威者が、その権威にふさわしく立派に振舞っているときに、彼を敬い従う

ことはたやすいことです。しかし、権威者が権威にふさわしくないみっともない姿をさらしてしまっただけでなく、その権威の下にある人々の服従の質が問われるのです。神が立てた権威であるゆえに、神を畏れて権威者を敬っていたのか、それとも、ただ単に立派な人だから、叱られるのが恐ろしいから、あるいは保身のためにとというような人間的な理由でその権威者に従っていたのかがテストされるのです。神を畏れていたセムとヤペテは、その信仰のゆえに、神が彼らの上に立てた父ノアを敬っていましたが、ハムはただ単に人間的な思いで父ノアを敬っていたにすぎなかったことが判明してしまいました。

やがて、ノアは酔いからさめると、末息子ハムが自分にしたことと、セムとヤペテが自分にしたことを知ると、セムとヤペテを祝福し、ハムの息子カナンをのろいました(同9:25)。このとき、なぜハム自身でなくカナンが呪われたのか理由は定かではありません。おそらくノアを侮辱したこの事件にはカナンが絡んでいたのではないかと思われます。他方、父の恥をおおったセムとヤペテは祝福されます(9:26, 27)。ノアの失敗のせいでハムとカナンが罪を犯したのですから、人間的な見方をすればノアはひどいなあと感じますが、ノアは、この時、預言者として神からことばを語ったのです。

2 権威と服従

これと類似した事件は、モーセに授けられた権威をめぐる起こっています。女預言者ミリヤムはモーセが弟のくせに民の指導者として振舞っていることが気に食わなかったのです。そこで兄弟アロンも誘って、クシュ人の女を妻としていることに関してモーセを非難し、さらに言いました。「主はただモーセとだけ話されたのでしょうか。私たちとも話されたのではないのでしょうか。」(民数12:2) 主はお怒りになりました。「なぜ、あなたがたは、わたしのしもべモーセを恐れずに非難するのか。」と主はおっしゃって、ミリヤムを打ちました。ミリヤムはツァラトに犯されて七日間宿営の外に締め出されます。

モーセはもう一度この種の反逆を経験しています。コラの反乱です。「彼らは集まって、モーセとアロンとに逆らい、彼らに言った。『あなたがたは分を越えている。全会衆残らず聖なるものであって、【主】がそのうちにおられるのに、なぜ、あなたがたは、【主】の集会の上に立つのか。』」(民数16:3) コラたちの言ったことは、一見、もつともです。しかし、それは神のみこころに反したことでした。そして、神様はただちに彼らを裁いて、地に反逆者たちを呑み込ませました。神は忍耐強いお方で、民の犯す個々の罪については、何度もこらえてくださいますが、この種の、神が立てた権威を侮る反逆に対してはただちにさばきを下されます。それは、神の家にと考えると、個々の罪を犯すことは窓ガラスを割ったり壁に落書きしたりすることですが、権威を侮ることは柱を斧で切り倒すことに等しいからです。家全体が崩壊してしまいます。

神はご自分の民を導くにあたって、ある人に権威を授け、その権威の下に置かれた人々には権威を敬うことをお求めになります。「あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人々は神に弁明する者であって、あなたがたのたましいのために

見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆いてすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にならないからです。」(ヘブル 13:17) あなたの上に立てられた権威者はかならずしも常に立派ではないかもしれませんが、あやまちを犯すかもしれません。その時、権威の下にある人の服従の質が試されます。つまり、権威ある人がただ立派だったから、その人を敬って従ってきただけなのか、それとも、その権威者を立てた神を畏れているので、従ってきたのかがはかられるわけです。セムとヤペテは神を畏れて父を敬ってきたことを証明して祝福を受け、ハムはただ単に人間的な理由だけで父にしたがってきたことをその行動で証明してのろいを受けてしまいました。

もうひとつ類似のことをあげると、サウル王のもとにいたときのダビデです。サウル王は民がダビデをほめそやすのを聞いて、彼に嫉妬して、殺害しようとしてきました。ダビデが命からがら逃げ出して部下たちとともに洞穴の奥に身を隠していましたら、ダビデを追跡してきたサウル王は、それを知らずこの洞穴に用を足しに来ました。部下たちはダビデにささやきました。「今こそ、【主】があなたに、『見よ。わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。彼をあなたのよいと思うようにせよ』と言われた、その時です。」そこでダビデは立ち上がり、サウルの上着のすそを、こっそり切り取ったのですが、ダビデは、このことについて心を痛めました。そして、ダビデは部下に言いました。「私が、主に逆らって、【主】に油そそがれた方、私の主君に対して、そのようなことをして、手を下すなど、【主】の前に絶対にできないことだ。彼は【主】に油そそがれた方だから。」(1サムエル 24:1-7 参照) このように振舞ったダビデを、主は祝福されたのはご存知のとおりです。ダビデは主を畏れて、主の立てた王を討つことを避けたのでした。

他方、神は、ご自分が権威を授けた人に対して、神に対して忠実であることと、託された民を支配するようにはではなく、自ら模範となって導くことを求めておられます。「あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。」(1ペテロ 5:2,3)

また、誰が一番偉いのかと議論している弟子たちに対して、主イエスはこう戒められました。「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。しかし、あなたがたの間では、そうでありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのももべになりなさい。人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」(マルコ 10:42-45) 神から人々を導く権威を授かった人は、謙遜に、自分のいのちを与える覚悟をもって、人々を導かねばなりません。

私たちはそれぞれ置かれた場で、家庭の中で、教会の中で、社会の中で神が立てられた権威を認識することが必要です。神は夫に妻に対する権威を授け、親には子に対する権威を授け、教会の指導者には信徒に対する権威を授けておられます。また、自分が誰かに対する権威を授かっていると自覚しているならば、神を恐れ愛をもって自分に託された人々に仕える心をもって導くべきです。権威の下にある者は、神を畏れて権威ある人に従うべきです。これが祝福ある人生の秘訣のひとつです。「『あなたの父と母を敬え。』これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、『そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする』という約束です。」（エペソ 6:2,3）

XXVII バベル

創世記 10 章はノアの子セム、ハム、ヤペテから出た諸民族の表です。次の 11 章バベルの事件は、民族がそのように分かれたことの原因譚であると理解されます。

1 権力者の出現

悪を滅ぼすための大洪水が終わり、人類が再出発しようとするとき、神は悪を抑制し社会秩序を保つために剣を持つ権威をお立てになりました。「人の血を流す者は、人によって、血を流される。」（創世記 9:6 前半）誰も暴力を振るわないならば、警察がピストルを持つ必要はありません。誰もスピード違反しないなら、制限速度標識だけあれば十分です。しかし、残念ながら罪の現実ゆえに、法律と武器と刑務所という暴力装置をもつ権力がいなければ、この世は治まらないという現実を聖書は告げています。

最初の権力者がハムの子孫ニムロデであったと聖書は告げています。彼は「主の前に力ある獵師であった」とあります（口語訳）。古代エジプトの壁画にも見られることですが、古代の王は恐ろしい野獣を仕留める偉大な英雄としてたたえられるばあいがあったようです。日本武尊がヤマタノオロチを退治したみたいな話です。「ニムロデは地上で最初の権力者となった。」（創世記 10:8）ニムロデにその自覚があったかどうかわかりませんが、彼は神のしもべとして、悪を行う人には剣をもって報いて社会秩序を維持するために用いられたわけです。

「それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなたが悪を行うなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行う人には怒りをもって報います。ですから、ただ怒りが恐ろしいからだけでなく、良心のためにも、従うべきです。同じ理由で、あなたがたは、みつぎを納めるのです。彼らは、いつもその務めに励んでいる神のしもべなのです。」（ローマ 13:4-6）

2 箱物行政の始まり

ところが、権力者はしばしば高ぶって、神の裁きを受けたという実例が、聖書に警告を伴って記されています。最初の権力者ニムロデからそうでした。ニムロデの王国は、「バベル、エレクト、アカデであって、みな、シヌアルの地に」ありましたが、それでは飽き足りず軍事力によって北へ北へと侵略して版図を拡張していったことが記録されています。「その地から彼は、アシュルに進出し、ニネベ、レホボテ・イル、ケラフ、およびニネベとケラフとの間のレセンを建てた。それは大きな町であった。」(創世記 10:9-12)。ニムロデの最初の根拠地シヌアルの地こそバベルの塔が建てられた地でした。悪魔は彼を「私を拝めば、世界はあなたのものです。」と誘惑したのでしょうか(ルカ 4:7 参照)。

「さて、全地は一つのことば、一つの話しことばであった。そのころ、人々は東のほうから移動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住しました(創世記 11:1, 2)。人々が移住してきたのは、東方が住みづらかったからでしょう。彼らは、チグリス、ユーフラテスの両大河に潤される地を見つけて住みつくと、石材の乏しいこの地にレンガで町を築き、やがて大建造物をも築く技術をも得ることになります。

ところが、そのうち人々は言うようになります。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。」(創世記 11:4) 塔建設の目的は、自分らの名を上げることでした。バベルの塔はニムロデの権力のシンボルであり、偶像でした。「箱物行政」ということばがあるように、古来、権力者は巨大建築を好みます。なぜか。自分の名を後世にまで鳴り響かせるためにです。巨大ピラミッドのゆえに私たちはクフ王という名を知っており、ヘロデ神殿といえばヘロデ大王、東大寺といえば聖武天皇、大阪城といえば秀吉、バベルの塔ならぬ「バブルの塔」と揶揄された新宿都庁ビルといえば、当時の都知事の名を思い起こすわけです。

3 バベルからバビロンへ

バベルの出来事が、私たちに教えるもう一つのことばは、都市の神格化です。カインが神に背を向けてエデンの東に最初の町を築いて以来、えてして都市と都市文明は神になり代わる偶像的存在です。都市は人工物に満ちているので、その住民は、創造主の世話にならなくても、自力ですべてのものを造り出して生きることができるという錯覚に陥りがちです。高層ビル群、道路網、行き交う車、地下鉄、IT 機器などすべてが便利な人工物であり、ショッピング街、酒場、劇場、ギャンブル施設などが提供する快樂も人工の快樂です。

バベルで言語が分けられて人類の分裂が起きて後、人類の歴史は民族と民族、国と国との数え切れないほどの争いの連続です。その歴史のなかで多くの都市が誕生し、そして、それらの都市はことごとく戦争や災害で滅びてきました。戦争になれば軍事標的は常に都市です。都市には、富と権力がとが集中しているからです。ソドムやゴモラもまずメソポタミアの都市国家連合によって攻撃を受けました(創世記 14 章)。あれは神からの警告でした。それでも悔い改めないでいたところ、ついに天から注ぐ硫黄の火によって滅ぼしつく

されてしまいました（創世記 18 章）。ソドムとゴモラだけでなく、旧約聖書に登場する諸都市はことごとく戦火で滅びています。

本来、神の都であったはずのエルサレムでさえソロモン以後は偶像の都と墮してしまっ
て、ついに紀元前五八六年、ネブカデネザル王に滅ぼされます。しかし、エルサレムを打
つ神の杖として用いられたネブカデネザルもまた、バベルにちなんでバビロンの都を築い
た権力者でした。バビロンは空中庭園を備えた壮麗な都でしたが、このバビロンもまた後
に滅亡することになります。

そして、新約聖書を見れば、ペテロの手紙ではバビロンという名はローマ帝国の首都ロ
ーマを指す隠語として用いられています（1 ペテロ 5 : 13）。しかし、栄華を極める都ロー
マに身を置いたペテロは「人はみな草のようで、その栄えはみな草のようだ。草は枯れ、
花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。」とイザヤの預言を引
用しつつ、都ローマの滅亡を予告するのです。

ヨハネ黙示録では、バビロンという古代都市の名は神に反逆し、ついには聖なる審判を
受けて滅びる終末の都市ないし都市文明を象徴する名として用いられていきます。ヨハネ
黙示録は、終わりの時に世界を支配する大消費文明都市を「大淫婦バビロン」と呼んで、
これに対する神の審判を告げています。「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、悪霊の
住まい、あらゆる汚れた霊どもの巣くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巣くつとな
った。それは、すべての国々の民が、彼女の不品行に対する激しい御怒りのぶどう酒を飲
み、地上の王たちは、彼女と不品行を行い、地上の商人たちは、彼女の極度の好色によっ
て富を得たからである。」（黙示録 18 : 2, 3）

現代でも都市文明は多くの人々のあこがれの的のです。人々は東京へ東京へと集中して行きま
す。今日の日本では東京都心の高層マンションに住み、都心のオフィスに住まうことがステイタス・
シンボルなのだそうです。しかし、文部科学省の地震調査機関によれば、マグニチュード7クラスの
首都直下地震が、今後30年以内に発生する確率は**70%**程度と予測されています。内閣府によ
ると、建物の全壊棟数、および火災で焼失する棟数は約85万棟、そして負傷者数は21万人、死
者数は約1万1000人と予想されています。（楽観的にすぎる数字であるとも見えます。）地方に住
んでいても、私たちは都市文明の影響をテレビやインターネットで受けています。「肉の欲、目の欲、
暮らし向きの自慢」は滅びるものです。

「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のう
ちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向
きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去
ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます。」（1ヨハネ 2:15-17）

XVIII 総括 バベル—アブラハム—世界の救い主の約束

1 復習

永遠の昔から、父子聖霊の三位一体の神が生きた愛の交わりのうちに生きておられました。神は、あるとき、見えるもの見えないものからなる多様で統一性のある豊かな世界とそこに住む人間を造ることになりました。

人間を創造なさったとき、神は人間に「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」とおっしゃいました。神は人間に世界の相続者としての務めをお与えになったのです。その相続人としての支配の務めを果たしうるために、神は人を「神のかたち」つまり、ご自身の御子に似た者として造ってくださいました。もっとも、最初の人完成したものとして造られたのではなく、完成を目指して恵みによって成長して行く者として造られました。エデンの園は、神が人とともに住んでくださる場でした。

けれども、人間の代表であった最初の人、神から与えられた善悪の知識の木のテストでサタンの誘惑に敗れてしまいます。善悪の知識の木は、神の主権を表すものでしたが、禁断の木の実を取って食べて、神に反逆してしまったのです。まず、彼らはあの慕わしかった神の御顔を恐怖を感じるようになりました。そして、人は自分自身の内部で肉体的意思に対する反逆を経験して「恥」を感じました。また、妻の夫に対する反逆と、夫の無責任と暴君的ふるまいの悪循環が夫婦の間に入ってきました。そればかりか、被造世界が人間に対して「いばらとあざみを生えさせて」叛逆するようになりました。

しかし、人間の叛逆のあと、神は「へびの頭を踏み砕く女の子孫」キリストの到来を予告しました。また、キリストが私たちに罪から贖う方法は、血を流して裸の恥をおおうお方であるという予告が、動物の皮衣によって予表されました。

園を追放されたのち、カインとアベルの出来事があり、その後、人類はカイン族とセツ族に分かれてゆきます。神を畏れないカイン族は都市を建設し、文明の利器を発明して神抜きで生きて行くすべを見つけて華々しく栄えてゆきます。他方セツ族は、主の御名を呼び求める一族となりました。しかし、やがてセツ族とカイン族は結婚を介して混ざってしまい、ノア以外、その思い測ることが神の前には悪となったので、神は大洪水をもって世界を滅ぼされました。これで一度目の歴史は閉じたのです。

大洪水のあと、神はノアに対して、水で世界を滅ぼさないという保持の契約を与えました。そのしるしは虹です。その後、権力者が出現し、彼らは自らの名を上げるために、バベルの塔を造りはじめました。箱舟は人類と動物たちを救う巨大技術でしたが、バベルの塔は単に権力者の虚栄のためでした。人類は神によってことばを変えられて、全地に散らされ、さまざまな民族と国々ができることになりました。

2 アブラハム契約——相続の契約

創世記第11章のバベルの事件以来、民族と民族の争いはあの日から絶えたことはありません。けれども、バベルの塔の事件が記されたすぐあと、同じ章の末尾にセムの子孫の中にアブラム（後のアブラハム）の名が現われます。神は、世界にひろがる諸民族の中から、まずアブラムを選んで、彼を信仰の父とし、彼の子孫の中から世界の諸民族の救い主キリストを登場させるという約束をお与えになるのです。主はアブラムに仰せられました。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」（創世記12：1-3）

バベルで分けられてしまった人類は、アブラハムの子孫として到来するイエス・キリストにあって一つの民、世界の相続人となるのです。最初の人間の代表は、「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。地を支配せよ」と世界の相続人としての任務を与えられながら、神に背いて転落しましたが、神はアブラハムの信仰の子孫として来るキリストによって新しい世界の相続人としての民を起こすのです。「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」（ガラテヤ3:28, 29）キリストの福音は世界に宣べ伝えられ、神の民が呼び出されて、聖なる公同の教会が形成されてきました。私たちキリスト者はそれぞれ地の塩、世の光として、神のみこころをこの世で行うことによって、神の国（支配）を拡大していくのです。しかし、その支配とはニムロデに始まる世の権力者の支配ではなく、イエス・キリストが行なわれた仕えるしもべとしての心を持った支配です。

神の国は、キリストの十字架の福音が伝えられ、そしてキリスト者である私たちがキリストの贖罪的な生き方に倣っていくところに広がっていきます。贖罪的な生き方とは、キリストが私たちの罪を「わたしには関係ない」とおっしゃらずに担ってくださったように、他人の落としたごみを「私には関係ない、あの人のゴミだ」と言わないで、自分のゴミのように拾う生き方をすることです。

そして、備えが終わるならば、ついに終わりの日には、神は新しい天と新しい地を造って、そこに罪を完全にきよめられた神の民を住まわせてくださいます（黙示録21、22章）。そこは、父なる神と子羊キリストの玉座が中央にあり、そこから聖霊のいのちの水が流れ出て全世界をうるおしています。神の民は、神の御顔を仰ぎ見つつ、しもべの心をもつ王として新しい地を治めることとなります。